岩波文庫
240

伊勢物語考參

昭和三年四月三十日印刷
昭和三年五月五日發行
昭和十年二月十日第五刷發行

參考伊勢物語★

定價二十錢

岩波文庫
240

校訂者　屋代弘賢

發行者　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波茂雄

印刷者　東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目　新井長治郎

株式會社會英秀舍印刷

發行所　東京市神田區一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
電話九段(33)〇〇一七・〇一八九・〇一八八番
〇〇三〇〇三番・小賣部一八〇番
振替口座東京二六二四〇番

（永井製本）

岩波文庫
240

伊勢物語考參

屋代弘賢校訂

序

古書は種々の理由からして異本を生ずるに至るものである。其中の一本が偶然の事情によつて流布本となると、それが自然に權威を有するやうになつてしまふ。然し流布本になるとならぬとは、其本が原本であるからといふのでも無く、又佳本であるからといふのでも無く、全く其本の性質上からのためでは無くて、社會事情の上から大に行はるゝのであるから、幸にして流布本が原本であり佳本であつた場合は宜しいが、さも無い場合には遺憾なことである。そこで志の篤い讀者が異本を得て參考校勘の事に從ひたくなるのは必至の勢であり、そして又參考校勘によつて僞誤を正し疑惑を闢き難義を解くを得るに至ることも之有ることである。古書は此の理由によつて參考本校勘本の得られる場合には、普通流布本よりは參考本校勘本を得て讀むのが利益であることは、誰しも知つて居ることである。伊勢物語は吾邦の古文學の中でも優秀のものである。が、中々古いだけは幾多の異本がある。で、單に流布本を信じて讀むよりは、參考本によつて讀む方が何ほど宜しいか知れぬ。むかし水戸では保元物語や平治物語等に皆參考本を出してゐるが、今岩波文庫中に伊勢物語を收むるに當つて參考本を採つたことは甚だ喜ばしい。參考本を讀むによつて得

るところの利の實例は本書の序文等にも記されて明らかである。古書の異本多さものは實に參考本によつて讀むべきである。

昭和三年春日

露伴學人識

參考伊勢物語　上卷

この物語はつくりものかたりにもあらす又しちのさうしにもあらすふたつをかねてもはら甄ふへきふみなりされと世には京極中納言のかかせ給へる本をのみつたへて猶うたかふへきことおほかるを今屋代弘賢ぬしこと本をあまたかうかへあはせて參考と名つけらるふむやのかみ衙の朝臣はからふみをもとゝしてみくにのふることをさへにこのみ給へは此參考を梓にちりはめんことをすゝめ給ふ弘賢ぬしをのれにことのよししるしてよとあるをすまふへきわさにはあらねといとまなきまゝに和歌一首をつくりてこれををくるのみ

伊勢の海のこかひにましる玉も草
かきあつめてそ光そひける

檢校保己一

伊勢物語京極黄門卿の校正されし比は異なる本ともゝ有けむに今は稀なるにや世に聞えさることゝ思ひつゝ年月ふるほとにめつらかなる本をそ見出たるその一つには塗籠御本なりこれは高二位の本朱雀院の塗籠に納まりて有しを傳へてかの卿のむすめ民部卿局の寫されしか森山孝盛ひめをけるにてはなはた異なるなり二つには中院大納言卿の筆にて黄門卿の手をへさる本を寫されしを檜山坦齋かわれに贈りしなりこれも又殊のほかにたかへるなり三には時頼朝臣の本なりかた假名にて書て奥に具平相傳本と朱もてかき寛元貳年中秋上六日主平時頼と墨もてしるしたり六條宮の御名はみえたれと眞名本とはおなしからす此ほかに藤谷黄門卿筆のは京極卿のとすこしことなる本なりこれらに眞名本なとあはせ考れは人人の難義といへるふし〳〵もをのつから意得らるゝをいとめてたきことゝおもひて拾穗抄の本文を寫し句ことにその異なるをしるして參考となつけ侍るなり文化十年三月廿四日源弘賢書

一塗滝御本初段より六段まで印本と次第同し七段印本に九段印本の八九十段より十五段まで印本と次第同し十六段印本の百十五十七段印本の十八段印本の十九段印本の二十段印本の廿一段印本の廿二段印本の廿三段印本の廿四段印本の廿五段印本の廿六段印本の廿七段より三十一段まで印本と次第同し三十二段印本の三十三三十三段印本の三十四三十四段印本の三十五三十五段印本の三十六三十六段印本の三十七三十七段印本の三十八三十八段印本の四十一三十九段印本の四十二四十段印本の四十一四十一段印本の四十二四十二段印本の四十三四十三段印本の四十五ゆくはたるの歌四十四段印本の四十五四十五段印本の四十七四十六段印本の四十八四十七段印本の四十九四十八段印本の五十四十九段印本の五十一五十段印本の五十二五十一段印本の五十三五十二段印本の五十四五十三段印本の五十六五十四段印本の五十七五十五段印本の五十八五十六段印本の六十一五十七段印本の六十二五十八段印本の六十三五十九段印本の六十四六十一段印本の六十五六十二段印本の六十六六十三段印本の六十八六十四段印本の六十九六十五段印本の七十六十六段印本の七十一六十七段印本の七十二六十八段印本の七十三六十九段印本の七十四七十一段印本の七十六七十二段印本の七十八七十三段印本の七十九七十四段印本の八十七十五段印本の八十一七十六段印本の八十四七十七段印本の八十二か七十八段印本の八十二くらしの歌七十九段御本開ト八十段印本の八十三八十一段印本の八十四八十二段印本の八十五八十三段印本の八十六八十四段印本の八十七八十五段印本の八十九八十六段印本の九十九八十七段印本の九十一八十八段印本の九十二八十九段印本の九十三九十段印本の九十五九十一段印本の九十六九十二段印本の九十七九十三段印本の九十八九十四段印本の百九十五段印本の百九十六段印本の百九十七段印本の百九十八段印本の百九十九段印本の百二百一段印本の百三百二段印本の百五百三段印本の百九百四段印本の百十

百五段印本の百十一　百六段印本の百十二　百七段印本の百十三　百八段印本の百十八　百九段印本の百十九　百十段印本の八十八　百十一段印本の百二十

百十二段印本の百廿一　百十三段印本の百二十二　百十四段印本の百廿三　百十五段印本の百廿四　百十六段印本の五十九

一爲家卿本初段より六段まで印本と次第同しの　七段印本の八十九　八段印本の九十　九段印本の十　十段印本の十二　十一段印本の十三　十

二段印本の十四　十三段印本の十五　十四段印本の十六　十五段印本の十七　十六段印本の十八　十七段印本の十九　十八段印本の二十　十

九段印本の二十一　二十段印本の二十二　廿一段印本の二十三　廿二段印本の二十四　廿三段印本の二十五　廿四段印本の二十六　廿五段印本の二十七　廿

六段印本の二十八　廿七段印本の二十九　廿八段印本の三十　廿九段印本の三十一　三十段印本の三十二　三十一段印本の三十三　三十二段印本の三

十五　三十三段印本の三十六　三十四段印本の三十八　三十五段印本の三十九　三十六段印本の四十　三十七段印本の四十一　三十八段印本の四

十二　三十九段印本の六十九　四十段印本の七十七　四十一段印本の七十七　四十二段印本の百二　四十三段印本の百七　四十四段印本の八十七

四十五段印本の九十六　四十六段印本の百十八　四十七段印本の八十二　四十八段印本の八十三　四十九段印本の八十五　五十段印本の八十五末の方

五十一段印本の八十四　五十二段印本の八十六　五十三段印本の四十五　五十四段印本の四十六　五十五段印本の九十三　五十六段印本の九十四

五十七段印本の六十七　五十八段印本の四十三　五十九段印本の四十四　六十段印本の百一　六十一段印本の八十一　六十二段印本の八十一　六

十三段雨のいみしうふり印本になし　六十四段印本の百十四　六十五段印本の六十四　六十六段印本の百十五　六十七段印本の六十五

六十八段印本の五十八　六十九段印本の五十九百　七十段印本の七十八　七十一段印本の七十九　七十二段印本の九十八　七十三段印本の九十五

七十四段むかし西院といふ印本になし　七十五段印本の百十七　七十六段印本の七十二　七十七段印本の七十三　七十八段印本

の百十六　七十九段印本の七十四　八十段印本の七十五　八十一段印本の百十一　八十二段昔有ける色このみの女印本になし　八十

三段印本の百廿一　八十四段印本の六十二　八十五段むかし女をぬすみて印本になし　八十六段印本の八十八　八十七段印本の六十一　八十八段印本の三十七　八十九段印本の百九　九十段印本廿一をかゝの歌の　九十一段印本の百五　九十二段印本の百六　九十三段印本の六十一　九十四段印本の九十七　九十五段印本の百　九十六段印本の五十　九十七段印本の六十三　九十八段印本の四十七　九十九段印本の四十八　百段印本の四十九　百一段印本の五十一　百二段印本の五十二　百三段印本の五十三　百四段印本の五十四　百五段印本の五十五　百六段印本の五十六　百七段印本の五十七　百八段印本の七十一　百九段印本の七十六　百十段印本の八十九　百十一段印本の九十　百十二段印本の九十一　百十三段印本の九十九　百十四段印本の百八百四　百十五段印本の百十　百十六段印本の百十二　百十七段印本の百十三　百十八段印本の百二十　百十九段印本の百二十二　百二十段印本の百廿三　百二十一段印本の百廿四　百二十二段印本の百二十五

参考に御本といふは塗籠御本なり家本とは爲家卿筆時本とは時頼朝臣所持相本とは爲相卿筆名本とは貞名本なり

むかしおとこ（御本ありはりトアリ）　うゐかうふりしてならの京かすかの里にしるよしゝてかりにいにけり（御本いきけり）そのさとにいとなまめいたる女はらからすみけり（御本いともなまめきたる女はらすみけり時本そのおとこ）この男（御本かのおとこ）かいまみてけり（御本かひなみトカケリ）おもほえす故郷にいとはしたなくて（御本いともはしたなく）ありけれはこゝ地まとひにけりおとこのきたりける（御本の文字ナシ名本壯士帰者迎例トカケリ）かりきぬのすそをきりてうたをかきてやるそのおとこしのふすりのかりきぬをなんきたりける

かすかのゝわか紫のすり衣しのふのみたれかきりしられす

となんをひつきていひやりける（御本となんをいつきてやれりける名本となんいへりける）ついておもしろきことゝもやおもひけん（御本ついて三字ナシおもしろ事とやトアリテおもひけん二句ナシ時名本ともノも文字ナシ）

みちのくのしのふもちすり誰ゆへにみたれそめにし我ならなくに（御本みたれそめけん）

といふ歌のこゝろはへなり（系本なる）むかし人はかくいちはやきみやひをなんしける

昔おとこありけり（御本此下みやこのはしりけるとなりトアリ）ならの京はゝなれ此京は人の家また（御本時本名本いはた）さたまらさりけるときに（御本時本名本に文字ナシ）にしの京に女有けりその女世人には（御本時本名本上の人には）まされりけり（御本さたりけり）その人（御本此一句ナシ）かたちよりはこゝろなんまさりたりけるひとりのみも（御本人所のみも名本ひとりのみにも本相本けりナシ名本勝有群利）あらさりけらしそれをかのまめおとこうち物かたらひてかへりきていかゝおもひけん時はやよひのついたち雨そをふるに（御本雨うちそはふりけるに時本ソホフル名本曾保第十有）やりける

おきもせすねもせてよるをあかしては春のものとてなかめ暮しつ

三 むかしおとこ有けりけさうしける女のもとにひしきもと（御本ひしきトアリ）も文字ナシ いふものをやるとて

思ひあらばむぐらの宿にねもしなんひしきものには袖をしつゝも

二條のきさきの（御本五條の后の）まだ（御本名本いまた）みかとにもつかうまつりたまはで（御本つかうまつらで）たゝ人にておはしましける（御本ましし二字ナシ）時の事なり（名本時事與社トカケリ）

四 むかしひんかしの五條に（御本名本東五條に）おほきさいの宮（御本時本の文字アリ）おはしましけるにしのたいにすむ人有けりそれをほいにはあらで（時本はにはあらで名本補因者不有）心さしふかゝりける人ゆきとふらひけるを（御本ゆきとふらふ人心さしふかゝりけるを）む月の十日はかりのほとに（御本むつきの十日あまり）ほかにかくれにけりあり所はきけと人の（名本の文字ナシ）いきかよふへき（御本いきよるへき名本往トカケリ）ところにもあらさりけれはなをうしとおもひつゝなん有ける（時本あり けるナシ）又のとしのむつきに（名本又のの文字ナシ）梅の花さかりに（御本さかりなるに時本ムメト書）こそをこひて（御本おもひて）いきて（御本名本かのにしのたいにいきて）立てみゐてみれと（御本立てみゐてみも文字ナシ名本おもひ出て立而見出難見トアリ）こそにゝるへくもあらすうちなきて（御本此一句ナシ）あはらなる板敷に月のかたふくまてふせりてこそをおもひいてゝ（御本名本こひて）よめる

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

とよみてよの（御本よの二字ナシ）ほの〳〵とあくるになく〳〵かへりにけり

むかしおとこ有けり東の五條（時本相本に文字アリ）わたりにいとしのひて（御本て文字ナシ）いきけりみそかなる所なれは所（御本しのふ所なれは）門よりも（時本カヨリシモ）えいらて（御本え文字ナシ）わらはへのふみあけたる（御本此一句ナシ名本ふみあけたりける）ついひぢの（御本時本家本名本ひ文字ナシ）くつれよりかよひけり人しけくも（御本人たかしくも）あらねとたひかさなりけれはあるじきゝつけてそのかよひ路に夜ことに人をすへてまもらせけれはいけとも（御本いけとも四字ナシかのおとこトアリ）時本名本相本も文字ナシ）えあはてかへりけり（御本時家本かへりにけり）さてよめる（御本さてつかはしける）

人しれぬわかかよひちの關守はよひ〳〵ごとにうちもねなゝん

とよめりけれは（御本とよみけるをきいたてて名本よみトアリ）いといたう心やみけり（御本いといたうえんしけるに相本いたくトおケリ）あるしゆるしてけり

二條のきさきにしのひてまいりけるを世のきこえ有けれはせうとたちのまもらせたまひけるとそ（御本二條后已下ナシ）

六

昔男ありけり女の（名本女のナシ）えうましかりけるを（御本えあふましかりけるを名本えうましかりける人を）からうしてぬすみ出て（御本名本女の心あはせてぬすみて出にけりかりけるとしろあはせてト書テ消テアリ）いとくらきにきけるを（御本いひわたりける名本けるに相本けりトアリ）あくた川といふ川をゐていきけ（家本ゆ）けれは草のうへにをきたりける（御本りけ二字ナシ家本たり二字ナシ）露をかれは（家本をれは）なにそとなん（時本なん二字ナシ）おとこにとひける（名本けるを）行さきおほく（御本ゆくさきはいとおほく名本ゆくさきと）夜もふけに（御本に文字ナシ）けれはおにある所ともしらて（名本しらす相本えしらて）神さへいといみしうなり雨もいたうふりけれは（御本雨いたうふり神さへいといみしうなりけれは）あはらなるくらに（御本あはらなるくらの有けるに名本亭有倉樹トアリ）女をは（家本女をは上下落張）お

くにおしいれておとこ（御本は文字アリ名本夫者トアリ）弓やなぐひを（時本を文字ナシ）おひてとくちにをり（御本名本をり）
二字ナシはやよもあけなんとおもひつゝゐたりけるに（御本ゐたりけるけとに）おにはやひとくちにくひてけり
（御本おにはや女をはひとくち云々）あなや（御本ゐやゐ）といひけれと（名本いへと）神（御本の文字アリ）なるさはきに、えきかさりけりやうやう
夜もあけゆくにみれは（御本よのゐけゆくを云々）ゐてこし女もなし（御本ゐ文字ナシ）あしすりをしてなけとも（名本ゐ文字ナシ）か
ひなし（御本ゐ文字も文字ナシ）
しら玉かなにそと人のとひし時露とこたへて消なましものを（御本時本相本けなましものを時本キエナ定本と註ぜり）
これは二條のきさきのいとこの女御の御もとに（御本御いとこのも御のもとに）つかふまつるやうにてゐたまへ
りけるを（御本つかふまつる人のやうに云々）かたちのいとめてたく（御本たうトアリ）おはしけれはぬすみておひて（御本おひて三字ナシ）
出たりけるを御せうとほりかはのおとゞたらうにつねの大納言（御本御せうとのたり川の大將もとつねのくにつね大納言なとの名本たり）あるをきゝつ
川の大將太郎基經くまだ（御本いまた）下らうにて内へまいりたまふにいみしうなく人（御本の文字アリ）
けてとゝめてとりかへしたまふてけり（御本とゝめて四字ナシ給ひてト共名本とりかへしたまひてけり相本たまひてけり）それをかくおにとはいふ
なりけり（御本いへる也）また（御本いまたまた）いとわかうて后のたゝに（御本たゝにきさいの）おはしける時とや（名本時の事也時本相本ときとかや家本しなの）
むかしおとこ有けり（家本名本おと）女をぬすみていて行道にて（家本いて二字なし）水のまむとゝふにうなつ
きけれはつきなんともくせねに（家本くせさりけれは名本此一句ナシ）手にむすひてのまん（家本わすトアリ名本手に二字ナシ）さて（家本さて二字ナシ）

ゐてのぼりにけり（家本のぼりければトアリ此所脱文ニヤ名本ゐてゆくに）女はかなくなりにければ（名本にはかにはかなくなりぬ）もとの所へゆく道に（肆本もとの所へかへりゆくに名本もとの所へかへるに）かのしみづのみしところにて

大原やせかゐの水をむすひあけてあくやといひし人はいつらか（肆本すひつゝあくやといひし人はいつくにきけり）

といひてきえかへり（家本といひてきけり）あはれくといへとかひなし（肆本といへとかひなし八字ナシ名本といひ以下ナシ）

七　むかしおとこありけり京にありわひてあつまにいきけるに（御本名本あつまへゆきけるに相本ゆきけるに）いせをはりのあはひの海つらをゆくになみのいとしろくたつをみて（御本なみのいとしろくたちかへるをみておもふことなきならねはおとこ）

いとゝしく過ゆくかたのこひしきにうらやましくもかへる浪哉（時本スキニシカタノ）

となんよめりけり（御本名本此一句ナシ肆本此一段ナシ）

八　むかしおとこありけり（御本此則そのものにおもひなして下六一句アリ）京やすみうかりけん（御本京にをらし）あつまのかたにゆきてすみところもとむとて（御本あつまのかたにすむへきところもとめにとていきけり時本もとめんとて名本すむへきところ）ともとする人ひとりふたりしてゆきけり（御本此一句ナシ時本いきけり）しなのゝ國あさまのたけにけふりの（御本の文字ナシ）たつをみて

しなのなる淺間のたけに立煙をちこち人のみやはとかめぬ（御本をちかたの人のトアリ次ノ段もとより云ニツヽク）

九　むかしおとこ有けりそのおとこ身をえうなきものにおもひなして（時本なし二字ナシ）京にはあらしあつまのかたにすむへきくに（名本すむへきところ）もとめにとてゆきけり（時本いきけり名本もとめんとて云々トアリ御本以上ノ文ナシ上ノ段ノ歌より以下もとより二ツヽク）もとよりともとする人ひとりふたりしていきけり（御本もろともにゆきけり）道しれる人もなくて（名本ひとりもなくて）ま

どひいきけり（御本ゆきけり）みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬそこを（御本を文字ナシ 名本そこをなん）やつはしといひけるは（御本いふことは）水ゆくかはの名本水堰河之トカケリくもでなれば（御本みつのくもてにはしをやつ御本なかれわかれて）木やわたせるによりてなんやつ橋といひける（御本やつ橋とはいへる）そのさはのほとりの（御本ほとりに）木の（御本の文字ナシ）かけにおりゐてかれいひくひけりそのさはにかきつはたいと（名本いと二字ナシ）おもしろくさきたりそれをみて（御本此所京いとこひしくおもはえさりけれはトアリ）ある人のいはく（御本のいはく四字ナシ）かきつはたといふいつもじをくのかみにすへて（御本名本くのかしらにすへて）たびの心を（御本を文字ナシ）よめといひけれはよめる（御本人の人よめり名本よめる三字ナシ）

から衣きつゝ馴にしつましあれははるゝきぬる旅をしそ思ふ

とよめりけれはみな人かれいひのうへになみたおとしてほとひにけり

ゆきゝて（時本時本前ト連書）するがのくにゝいたりぬ（名本にいたりぬ五字ナシ）うつの山にいたりてわかいらんとする道は（御本わかゆくすゑのみちは）いとくらく（御本くらく）ほそきにつたかへてはしけり（御本つたかへてらはしけりて）物こゝろほそく（御本はすゝろなるめをみる事とおもふにす行者あひたりかゝる道は（御本にはいかてかいまするといふを（御本いかてかおはするといふに名本いかゝおはしましつるといふかり）みれはみし人なりけり京にその人の（御本時本京本名本御文字ナシ）もとにとてふみかきてつく

するかなるうつの山へのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり（御本うつゝとも夢にもひとの）

ふしの山をみれはさ月の（御本の文字ナシ）つこもりに（御本に文字ナシ）ゆきいとしろふれり（御本しろくふりたり 京本しろくふれり）

時しらぬ山はふしのねいつとてかゝのこまたらに雪のふるらん

その山はこゝにたとへは（御本たの山はうゑはひろくしらはせはく大かさのやうになん有けるたかさは）ひえのやまをはたちはかりかさねあけたらんほとして（御本はとして四字ナシやうになん有けるトアリ）なりはしほりのやうになん有ける（御本此一句ナシ　御本なかはは しほりの山と五人いひける）なをゆきくてむさしのくにとしもつふさの（御本ふ文字ナシ）國との中に（御本國と二つか中に）いとおほきなる川ありそれをすみた川といふ（御本たのゑはのゑをはすみた川となんいひける）そのかはのほとりにむれゐておもひやれはかきりなくとをくもきにけるかなとわひあへるに（御本わひをれは）わたしもりはやふねにのれ日もくれぬといふに（御本に文字ナシ）のりてわたらんとするに皆人もものわひしくて京におもふ人なきにしもあらすさるおりしも（御本しもに字ニツクル）しろき鳥のはしとあしとあかき（御本時本あかきか）しきのおほきさなる水のうへにあそひつゝいをくふ京にはみえぬ鳥なれは（名本鳥なり）みな人（御本人々トアリ　叡本みな人ナシ）みしらすわたし守にとひけれは（御本とへは）これなん都鳥と（御本申）いふをきゝて

名にしおはゝいさことゝはん都鳥わかおもふ人はありやなしやと（御本人はの文字ナシ）

とよめりけれは（叡本とは）ふね（御本舟人）こそりてなきに（名本に文字ナシ）けり（諸本こゝにて終る御本には下ノ文アリ）その川わたりすきてみやこにみしあひてものかたりしてことづてやあるといひけれは

みやこ人いかにとゝはゞ山たかみはれぬ雪のにわふとこたへよ

十　昔おとこむさしの國までまとひありきけりさて（御本さて二字ナシ塚本上ノ文ナクテ上段ヨリ已下まてそのくにゝト云ニ習ツヽケアリ）そのくにゝあ

る女を（御本たのくになる女を）よはひけりちゝはこと人にあはせんといひけるを（家本けるに）はゝなんあてなる人にこゝろつけたりけるちゝはなを人にて（御本たゝ人にて）はゝなん藤はらなりけるさてなんあてなる人にとおもひけるこのむこかねによみてをこせたりける（御本をこせたる名本やりけるトアリ）すむ所なん（御本すむさとは家本すむところなんナシ）いるまの郡（御本時本ニむさしのくにトアリ）（家本名此上）みよしのゝさとなりける（御本けるニ字ナシ）

みよしのゝたのむかりもびたふるに君かかたにそよるとなくなる

むこかねかへし（御本かへしむこかね）

わかかたによるとなくなるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれん

となん（御本此三字ナシ）人のくにゝてもくにまて（名本人の名本こゝにはトアリ相本なをナシ）なをかゝることなむ（名本こゝにはトアリ相本なをナシ）やまさりける（御本なをナシかゝることは）

むかしおとこ（御本有けりトアリ）あつまへゆきけるにともたちともに（御本ともに二字ナシ家本もたちともに七字ナシ）（家本みちよりともたちのもとへいひをこせたりける名本をこせたりける）みちよりいひ（御本ニ字ナシ）をこせける

わするなよほとは雲ゐになりぬとも空ゆく月のめくりあふまて

十二

むかしおとこ有けり人のむすめを（御本女をトアリひとのナシ）ぬすみてむさしのへゐて（御本むさしのくにへ）ゆくほとにぬす人なりけれはくにのかみにからめられにけり（御本くにのつかさからめけれは）女をはくさむらの中に（名本此朋かくしトアリ）をきてにけにけりみちくる人（御本名本みちゆく人）この野はぬす人あなりとて（御本ぬす人あり）ひつけんとす（御本火をつけ

んとするに名本火つけんとすれは　女わひて

むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれり我もこもれり

とよみけるを（御本名本よめるを）　きゝて女をは（御本この女をは）　とりてともにゐていにけり（御本ともにゆきにけり）

十三

昔むさしなるおとこ京なる女のもとにきこゆれははつかし（御本はつし）　きこえねは（御本こねは）（御本京本）　くるし

とかきてうはかきにむさしあふみとかきて（御本むさしあふみとのみかきて）　をこせて（御本をこせてナシ名本やりてトアリ）　のちをともせ

すなりにけれは京より女

むさしあふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもうるさし（御本時本名本三句おもふには名本然衆而トカケリ）

とあるをみてなん（御本をんなトアリ）　たへかたきこゝちしける（御本けり）

十四

とへはいふとはねはうらむ武藏あふみかゝるおりにや人はしぬらん名本かゝる節にトキ

むかしおとこ（名本有けり）　みちのくに（名本みちのくにに出て）　すゝろに行いたりにけり（御本名本行文字ナシ家本すゝろにいたりて）　そこなる

女京の人は（御本名本京の人をは）　めつらかにやおほえけん（御本名本めつらやかにかおもひけん）（名本おもひけん）　せちにおもへるこゝろなん

（御本けし）　有ける（御本見えける）　さてかの（御本かの二字ナシ）　をんな

中〳〵にこひにしなすはくはこにそなるへかりけり玉のをはかり

うたさへそひなひたりける（御本ひかめりける）　さすかにあはれとやおもひけんいきてねにけり夜ふかく

いてに（名本に文字ナシ）けれは女

夜もあけはきつにはめなてくたかけのまたきになきてせなをやりつる

といへるに（御本といひける家本といへ本といひけるを）おとこ京へなんまかる（名本ゆく）とて

くり原のあねはの松の人ならはみやこのつとにいさといはましを（御本名本歌の留りを文字ナシ相本天福本あれはの松トアリ）

といへりけれは（家本けれはけ）よろこほひて（御本に文字ナシ）おもひけらしとそ（御本おもひけりくしとそ）いひをりける（御本をりこ二字ナシ）

十五

むかし（御本家本相本むかしこトアリ名本むかしこ有けり）みちのくにゝて（御本みちのくにへいきありきける名本至三津國トカケリ）なてうことなき人のめに（御本人のむすめに）かよひけるにあやしう（御本あやしく）さやうにてあるへき女とも（御本家本女には時本女にも名本女にても）あらすみえけれは（名本あらさりけれは）

しのふ山しのひてかよふ道もかな人の心のおくもみるへく（御本家本外語大みつくくトアリ）

女かきりなくめてたしとおもへとさるさかなきえひすこゝろをみては（御本えひす所にて名本に文字ナシ）いかゝせんは（御本いかゝせんこの次おきのねてノ段ニツゝク）

十六

むかしきのありつねといふ人有けりみよのみかとにつかうまつりて（御本つかへて）時にあひけれと（御本あひたりけれと）のちは（御本のちには名本此三字ナシ）世かはりときうつりにけれはよのつねの人のこともあらす（御本よのつねときうしなへる人になりにけり名本よのつねのことともあらす）ひとからはこゝろうつくしく（御本家本うつくしう）あてはかなることをこのみて（御本

はか二字ナシ名本あてなるこ　とをこのみて　こと人にもにす　御本此間ニよのわたらひこゝろなく本此間ニよのわたらひ心もなく名　まつしくへても　御本時本　本まつしくても　名本まつしくても　なをむかしよかりしときのこゝろなから　御本ありわたりけるに　よのつねのこともしらすとしこころ　御本としこころ四字ナシ　あひなれたるめ　御本めもなれたるめ　本あ　やう〳〵とこはなれてつゐにあまになりてあねのさきたちてなりたる所へゆくを　御本あねのさきたちてあまになりにけるゝかもとへゆく　本名本もとへゆくを　れいまはと　御本て文字アリ　ゆくをいとあはれと　御本は文字アリ　おもひけれとまつしけれはするわさもなかりけり　御本おもひけれと以下ナシ　おもひわひてねんころにあひ　御本あひ二字ナシ　かたらひけるともたちのもとに　御本のもと三字ナシ　かう〳〵　御本かくツクル　いまはとてまかるを　名本ゆくを　なにこともいさゝかなることも　御本いさゝかのことも　本なにこと已下ナシいるゝかなることを　御本え文字なし　えせて　つかはすことくかきておくに

手をおりてあひみしことをかそふれはとをといひつゝよつはへにけり　御本二ノ句へにけるとしを名本拾十五トカケリ　トサアイヒツ、

かの　御本このともたち是をみていとあはれとおもひてよるの物までをくりてよめる　御本女のさうそくを一具をくるとてトアリよるのもの已下文ナシ

年たにもとをとてよつはへにけるをいくたひ君をたのみきぬらん　御本よつをへにけるをトアリ　結句たのみきつらん名本ニノ句拾十而トカケリ

かくいひやりたりけれは　御本やり二字ナシよろこひにそへて　本いひやりたれは名本かくいひてやりたりけれは

これや此あまのは衣むへしこそ君かみけしとたてまつりけれ（御本きみかみけしに）

よろこひにたへて又（御本たへかかねて又）

秋やくる露やまかふと思ふまてあるは涙のふるにそ有ける

十七　年ころ（御本時ゝ（家本むかし）年比）をとつれさりける人のさくらの盛にみにきたりけれは（御本さくらみにきたりけれは（家本さくら）

みにきたりける（御本名本）にあるし（名本此三字ナシ）

あたなりと名に社たてれ櫻花年にまれなる人も待けり

かへし

けふこすはあすは雪とそ降なましきえすは有とも花とみましや（御本四ノ句も文字なし）

十八　むかしなま心ある女有けりおとこちかうありけり（御本おとこかういひけり本名本おとこかくいひけり）女うたよむ人なりけれ

はこゝろみむとてきくのはなのうつろへるをおりて（御本梅をおりて家本とりて三ツクル）おとこのもとへやる（御本おとこのもとへハナシ家本おとこノ已下ナシ名本やりけるトアリ）

くれなゐにゝほふはいつらしら雪の枝もとをゝにふるかともみゆ（御本枝もたはゝにふるやともみゆ家本ふるかとそ見る）

おとこしらすよみにける（御本よみけり名本しらすよみけり）

くれなゐにゝほふかうへの白菊はおりける人の袖かとも見ゆ（御本三ノ句しら雪は若句補かとそみる名本たてかとそみる）

十九　むかしおとこみやつかへしける女のかたに（御本のかたに四字ナシ家本かたに三字ナシ）こたちなりける人をあひしりた

りける（御本あひしれりけり　本名本けり）ほともなく（本はとなくて　名本はとなく）かれにけりおなしところなれは（御本名本なりけれは）女のめにはみゆるものから（御本女ノ上ニすかに四字アリ）おとこはあるものかとも（御本あるゝのにも　本あるものとり名本あるものも）おもひたゝす（御本おもひ　本たらねは）女（家本ナシ文字ナクテ業平朝臣紀のありつねか むすめにすみ侍りけるをうらむることありてしたらねはきてゆくるりはかへりけれはよみてつかはしけるありつねか女アリ）

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆるものから

とよめりけれは（本とよみけれは）おとこかへし（御本かへしナシ）

あまくものよそにのみしてふることはわかゐる山の風はやみなり（御本行かへり空にのみして家本二ノ句よそにのみして）

とよめりけるは（御本とよめるは家本とよみけるは名本已下文ナシ）又（御本本文ナシ）おとこある人となんいひける（御本あまなおとこある女になん有ける　家本男あはたもたりける人になん廿有ける）

むかし男（名本有けりトアリ）やまとにある女をみて（御本本名本みて二字ナシ名本有ける女を）よはひてあひにけりさてほとへて（御本ほとへて　本しける）みやつかへする（御本本ナシ）人なりけれは（家本人なれはかへりくる（御本かへりける）道に彌生はかりに（名本に文字ナシ）かえてのもみちの（御本本かえての上やまに三字アリ　家本下ノ文字ナシ）いとおもしろきをおりて（本おりてナシ見てトアリ）女のもとに（御本女ノ上ニすみし三字アリ）道よりいひやる（御本本いひやる四字ナシ名本いひやりたりける）

君かためたをれる枝は春なからかく社殊のもみちしにけれ

とてやりたりけれはかへりことは京にきつきてなん（御本京にいきつきてなん　家本京にきてなん名本京につきてなり）もて（名本もちて）きたりける

廿二　いつのまにうつろふ色のつきぬらんきみかさとには春なかるらし（御本時本春なかるへし）

むかしおとこ女いとかしこく（御本かしこう）おもひかはして（名本おもひかよはして）こと心なかりけり（御本なかりけるを）さるを（御本此三字ナシ）いかなる事か有けんいさゝかなることにつけて（御本はかなきことにとつけて本いさゝかなることとつけて）世中をうしとおもひて（家本いとうしとおもひて相本て文字ナシ）いてゝいなんとおもひて（御本おもひ三字ナシ）かゝるうたをなんよみて（御本を文字ナシ御本家本よみて三字ナシ）物にかきつけゝる（御本けりニツクル名本書つけたりけり）

いてゝいなは心かるしといひやせむよの有さまを人はしらねは（御本家本二句心かろしと御本名本終句人はしらすて）

とよみをきて（御本をき二字ナシ）出ていにけりこの女（御本このおんなと）かくかきをきたるを（御本家本名本此ド二字ナシ時本をき二字ナシ）けしう（御本名本此三字ナシ家本けにゝトアリ）こゝろをくへきこともおほえぬを（御本にこころうかるへきこともおほえぬを名本心をかるへきこともなきを）なにゝよりてかかゝらんと（御本なにゝよりてならん家本かゝるらんと）いといたうなきて（御本家本名本ろうちなきて）いつかたにもとめゆかんと（本もとめゆかんと）かとにいてゝとみかうみゝけれと（時本とみかうう見けれと）いつこをはかりとも（御本いとをはかとも時本名本はかとも家本いつくをはかとも）おほえさりけれはかへりいりて

おもふかひなき世也けり年月をあたに契りて我やすまゐし（御本われかすまひし）

といひてなかめをり（御本此句次ニアリ家本て文字ナシ）人は（いさの歌ノ人はいさゝトアリ）

この女いとひさしく（御本ひさしう本）ありてねんしわひてにや有けむ（御本ねんしかねてにやあらん本に文字ナシ）いひをこせたる

（御本かくいひをこしたり家本たりけるなかけるニツクル）

いまはとてわするゝ草の種をたに人のこゝろにまかせすもかな

かへし（御本男トアリ）

わすれ草うふとたにきく物ならはおもひけりとはしりもしなまし（御本二ノ句かるとたにきく家本同ろしとたにきく）

また〳〵ありしよりけに（家本又〳〵ナシあしよりもけにトアリ）いひかはし（名本かよはし）ておとこ

わするらんとおもふ心のうたかひにありしよりけに物そかなしき

かへし

中空に立ゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな（御本家本終句なりぬへきかな）

とは（御本名本は文字ナシ）いひけれとをのか世々になりにけれは（家本に文字ナシ）うとくなりにけり（名本うとくをなりにける）

むかし（廿二）はかなくて（家本て文字ナシ）たえにける中猶や（御本猶やナシをかトアリ名本中の下ニを文字アリ）わすれさりけん女のもとより

うきなから人をはえしもわすれねはかつうらみつゝなをそこひしき

といへりけれは（御本名本といひけれは）されはよと（家本されはよとよと）いひて（御本あもひて）おとこ（御本此三字ナシ）

あひみては心ひとつをかはしまの水のなかれてたえしとそおもふ（御本初句あひはみて）

とはいひけれと（家本は文字ナシ名本といひけれは）そのよいにけり（名本その夜いきねけり）いにしへゆくさきのことゝもなとい

ひて（御本とゝもそおもとも家本とも二字ナシ）

秋のよの千代を一夜になすらへてやちよしねはやあく時のあらん　時本三句なそらへて家本四ノ句やちよをねてや御本結句あくしのあらん相本あく時のなからん

かへし

秋のよのちよをひとよになせりともことはのこりてとりやなきなん　時本とりやなきてん

いにしへよりもあはれにてなんかよひける　御本家本名本いにしへ已下ナシ

廿三

むかしゐなかわたらひしける人のことも井のもとにいてゝあそひけるをおとなになりに　御本に文字ナシ

けれはおとこもをんなもはちかはして有けれと　時本有けれはおとこはこの女をこそえめとおもふ　御本とおもふ四字ナシ名本おもひトアリ　女は家本女もこの男をとおもひつゝおや名本母トアリのあはすれとも　御本名本あはすること家本あはすれをもきかてなん有けるさてこの名本その　となりの名本となりの四字ナシおとこのもとよりかくなん　御本かく三字ナシ

つゝゐつのゐつゝにかけしまろかたけすきにけらしないもみさるまに　御本下句をひにけらしなきみしさるまに時本名本初句つゝゐつゝ家本相本四句すきにけらし

女かへし　御本名本かへし女トアリ

くらへこしふり分髪もかたすきぬきみならすしてたれかあくへき　御本終句たれかなつへし小四ノ句きみならてかは家

なといひ〳〵て　御本かくいひて時本家本名本かくいひて　つゐに　御本つゐに三字ナシほゐのことくあひにけりさて年比ふるほとに女おやなく　御本女のおやなくなりて　たよりなくなるまゝに　御本たよりなかりけれはもろともにいふかひなくて　御本もろとも已下ナシかく

てトアリあらんやは（名本は文字ナシ）とてかうちのくに（御本かうちのくにいき）たかやすのこほりにいき（家本ぬき）かよふところいてきにけりさりけれと（御本りけ二字ナシ）このもとの女（名本もとの妻トアリ）あしとおもへるけしきもなくて（御本名本て文字ナシくるれはトアリ家本くるれはトアリ）いたし（御本名本たしたてい）やりけれはおとこことこゝろありてかゝるにやあらんとおもひうたかひてせんさいの中に（家本あらん巳下ナシ）かくれゐてかうちへ（御本名本かのかうちへ）いぬるかほにてみれはこの（御本此ナシ）女いとよう（家本いと二字ナシよく）けさうしてうちなかめて（定本よめるトアリ）

風ふけは沖津しら浪たつた山よ半にや君かひとりこゆらん（御本時本名本終句ひとりゆくらん）

とよみけるを（御本とよめりけるを）きゝてかきりなくかなしとおもひてかうちへもいかす（御本おさ〳〵かよはす家本いなす名本おゆかす）なりにけりまれ〳〵（御本まれ〳〵上二さてトアリ）かのたかやすに（御本たかやすのこほりに）きて（御本名本いきて家本ゆきて）みれははしめこそ心にくも（名本相本心にくいも）つくりけれいまはうちとけて（御本しトかみをかしらにはきあけてアル家本かみをかしらにはきあけておもなかやかなる女名本ニハたりけるを時本もたりけるを）とりてけこのうつはものにもりけるを（御本家本もりてけてトアリ）みて心うかりていかす（家本ゆかす）なりにけり（名本けはなりるけりるを）きりけれは（家本まれは名本此一句ナシ）かの女やまとのかたをみやりて（家本のたかやすの女はやまとのかたをなかめやりて）

君かあたりみつゝをゝらんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも（御本二句みつゝをくらん初句君かゝたみつゝをくらん）

といひて（家本ひつい）みいたすに（名本みいてたすに）からうしてやまと人こんといゝり（家本やまとの人名本きたらんといひたりけれは）よろこひてまつにたひくすきぬれは（名本すきにけれは）

君こんといひし夜ことにすきぬれはたのまぬものこひつゝそふる（御本時本四ノ句たのめぬもの　御本終句こひつゝそをる相）

といひ（本こひつゝそぬる　御本いへり）けれと（家本けれは）おとこすますなりにけり

むかし（廿四）おとこ（名本男女トアリ）かたゐなかにすみけりおとこ（家本此一句ナシ）みやつかへし（家本し文字ナシ）にとてわかれおしみて（時本名本わかれをおしみてゆきに（家本名本に文字ナシ）けるまゝに三とせこさりけれはまちわひたりけるに（御本はちわたりけるとあり　家本いはなさちわひた）いとねんころにいひける人にこよひあはんとちきりたりけるに（時本名本二字ナシ）此男きたりけりこのとあけたまへとたゝきけれと（御本名本けれは）あけて（御本あけてなん　家本あけて女）歌を（家本を文字ナシ）なん（御本なん二字ナシ）よみていたしたりける

あら玉のとしの三とせを待わひてたゝ今宵こそにゐ枕すれ

といひいたしたりけれは（御本家本名本相本なとトアリ）

あつさ弓まゆみつき弓年をへてわかせしかことうるはしみせよ

といひていなんとしけれは女（御本いなんとすれはうらみてをんな）

梓弓ひけとひかねとむかしより心はきみによりにしものを

といひけれと男かへりにけり女いとかなしくて（御本かなしろ）しりにたちてをひゆけと（御本をひけれと）えをひつかてしみつのある所にふしにけりそこなりける（御本そこなる）いはに（名本石イシ）をよひの（家本をゆひのを）ちしてか

きつけゝる（御本けりニツクル）
あひおもはてかれぬる人をとゝめかねわか身は今そくちはてぬめる（御本終句をえはてぬめる）
とかきてそこに（御本そこにナシ　家本名本かのところに）いたつらになりにけり（家本けるニツクル）
廿五
昔おとこ有けりあはしともいはさりける女のさすかなりけるか（家本さすかなるか）もとにいひやりける
秋のゝにさゝ分し朝の袖よりもあはてぬるよそひちまさりける（御本秋のいの）
いろこのみなる女かへし（御本家本名本相本なりける女かへし）
みるめなきわか身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくゝる（御本二句わか身のうしとトアリ此次われはかりの段ニツヽク家本此歌ノ次いにしへきゝみし上りもまさりてなんおはへけるトアリ）
廿六
むかしおとこ（家本おとナシ）五條わたりなりける女をえゝすなりにける事とわひ（家本わひ）たりける（時本を文字アリ）ひとの返事に
おもほえす袖にみなとのさはくかなもろこしふねのよりしはかりに（時本名本二ノ句袖にはみたの家本四句もろこしふねのねも御本此一段ナシ）
廿七
むかしおとこ女のもとに（御本人のおすめのもとに）ひとよいきて（御本いちやはかりいきて家本一夜ナシきてトアリ）又も（家本も文字ナシ）いかすなりにけれは女の（御本此下ニおやはらたちてトアリ）手あらふ所にぬきすをうちやりて（御本ぬきすをとりてなけすてけれは）たらひのかけに（御本たらひの水になくかけの）みえけるを（名本ろつりけるを）みつから

われはかり物おもふ人は又もあらしとおもへは水の下にも有けり（御本下にものゝ文字ナシ）

とよむを（御本とよめりけるを家本とこさりけるおとこたちきゝて御本このこさりけるおとこきゝて名本きゝつけて家本かのなん名本とよめりけれは）

みなくちに我やみゆらん蛙さへ水の下にて諸聲になく

（廿八）むかしいろこのみなりける（家本此下ニところ／＼れけるトアリ）女出ていにけれは（御本名本此下ニいふかひなく／て男家本男いふかひなかりて）

なとてかくあふこかたみになりにけん水もらさしとむすひしものを（御本あふこかたみとなりにけらん終句ちきりしものを家本）

（本二句あふをかたみに）

（廿九）むかし（御本むかし三字ナクテなと／てかくノ段ニ書ツヽケ有）春宮の女御の（御本名本相本二條のきさきの春宮の御且所と申けるとき）御かたの花の賀に（御本になのゑんに御かたに花のゑんに家本）

めしあつけられたりけるに（御本めしあられたりける肥後のすけなりける人家本めしあつへられたりけるにひこのすけなりける人名本めしあけられたりける近衛司なりける人）

花にあかぬなけきはいつもせしかともけふのことひにゝる時はなし（御本終句しくものはなし一本しくをりはなき此次によみてたてまつれり家本にるものはなし名本此次一段アリ是をのす）

むかしおとこ女をぬすみてゆくみちに水ある所にておとこのまむやとゝふにうなつきけれは結ひてのますさてゐてゆくにはかにはかなくなりぬ男もとの所へかへるにかの水のみし所にて

おほはらや堰（セキ）のし水尾むすひあけてあくやとゝひし人はいつらは

（三十）むかしおとこはつかなりける（家本はつかなる）女のもとに（御本のもとに三字ナシ）

あふことは玉のをはかりおもほえすつらき心のなかくみゆらん（御本なかくみるらん）

廿一　むかし（御本男トアリ）みやのうちにてあるこたちのつほね（御本家本みつはね）のまへをわたりけるに（御本家本わたるに）何の（御本名本なにを）あたにかおもひけん（家本御本あたとかおもひけん家本何をかあたに思けん）よしや草葉よ（御本家本名本よ文字ノニツクル）ならんさかみむといふ（御本いひけれは名本いふをは）おとこ（家本の文字アリ）

つみもなき人をうけへは忘草をのかうへにそおふといふなる（時本二句人をうらみは終句おもふといふなる）

といふをねたむ（御本相本ねたう）女も有けり（御本女もおもひけり此次あしへよりノ段ニツヽクル）

廿二　むかしものいひける女に（家本のツクル）年ころありて

いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしを今になすよしもかな

廿三　といへりけれと（相本とも）なにとも（家本何ことも）おもはすやありけん（御本此一段ナシ）

むかしおとこつのくにむはらの郡にかよひける女このたひいきては（御本むはらの郡にすみける女にあよひけるこのたひかへりなは家本）おもけしきをみて女のうらみけれは家本なりけれは）おとこ（御本おとこナシ）

あしへよりみちくるしほのいやましにきみに心を思ひますかな（御本初句あし也より）

かへし（御本女かへし）

こもり江におもふ心をいかてかは舟さすさほのさしてしるへき

ゐなか（御本ゐなかの）人のことにてはよしやあしや（御本よしやあしやヲいかヽニツクル家本此一句ナクテおもなくていつるなるへしトアリ）

廿四 むかしおとこつれなかりける人のもとに

いへはえにいはねはむねにさはかれてこゝろひとつになけく比かな 御本いはねは（ね）の名本御句いへ（はいへ）家本此段歌已上ナシ

おもなくて（御本思ひて）いへるなるへし

廿五 むかし（御本男トアリ）こゝろにもあらてたえたる人のもとに（御本たえにける女のもとに）

玉のをゝあはをによりてむすへれはたえての後もあはんとそ思ふ（御本ドノ句あひてのち後もあはぬなりけり）

廿六 昔わすれぬる（御本る女字ナシ）なめりととひことしける女のもとに（名本のもと三字ナシ）

谷せはみみねまてはへる玉かつらたえんと人にわかおもはなくに（御本四ノ句たえんと人をトアリ此歌ノ次ニ女かへしいつはりとおもふものから今さらにたかさことをかわれはたのさん時本校合ニ定本かへし有いつはりとおもふものから云々家本此段歌クテきみによりの段ニツヽク）

廿七 むかしおとこ（家本男ナシ）いろこのみなりける（名本色ゝのみなる）女にあへりけり（御本人をかたらひてトアリ女にあへりけりナシ家本あひしれりけり名本あひにけり）

うしろめたくや（御本うしろめたなしとや時本うしろめたなくや）おもひけん

我ならて下ひもとくな朝かほの夕かけまたぬ花には有とも（家本月かけまたぬ花になれは）

返し（御本女かへし）

ふたりしてむすひしひもを獨してあひみるまてはとかしとそ思ふ（御本二ノ句むすひしものを御本家本四句あひみんさては家本此次はなよりもノ段ニツヽク）

卅八 むかしきのあり つねかりいきたるに（相本いきたりけるに）ありきてをそくきけるによみてやりける（御本おかりつねものにいきてひさしうかへらさりけるにいひやる家本昔きのありつねものへゆきてをそくかへりけるによみてつかはしける名本むかしきのありつねものにいきてをそくきけるによみてやりける）

君によりおもひならひぬよの中の人はこれをやこひといふらん

かへし

ならはねは世の人ことに何をかもこひとはいふととひしわれしも（御本終句とひわふれとも家本三ノ句何をかはこ次いてしいたはの段ニツヽク）

卅九 むかしさいゐんのみかとゝ申（家本申し）みかとおはしましけりそのみかとのみこ（名本親王）たかいこと申すいまそかりけり（相本いまそかりけり）そのみこうせ（名本疾カセ）たまひて御（時本をはんの家本かのみやトアリの文字ナシ）はふりの夜そのみやとなりなりけるおとこ御（御本御はふりみんとてナシ）はふりみんとてうちなきてやみぬへかりける（家本ゐて）ゐて出たてまつらす（家本此間みな二字アリ）ありけりとひさしう（時本家本ひさしく）ありけりとひさしくたてよへりぬへかりける）あひたに（家本に文字ナシ）あめのしたの色このみ（名本すかへにおとこ一句ナシ）（家本名本此一句ナシ）みなもとのいたるといふひと（名本人ノ字ナクテあめかしたのいろこのみなりけるトアリ）これも物みるに（家本名本此一句ナシ）この車を（家本此一句ナシ）女くるまとみて（名本一説女ひとりの車とおもひて）よりきて（家本よりきぬ）とかく（家本かうニツクル）なまめくあひたにかのいたるほたるをとりて女の車にいれたりけるを（名本けれは）くるまなりける人この（家本かの）ほたるのともすひ（家本ひ文字ナシ）にやみゆらん（家本あらん名本歟似トアリ）ともし（名本とおもひて）けちなんすると（時本家本けちなんとすると名本けちなんとすとて）のれる（名本ナシ）おとこのよめる

いてゝいなはかきりなるへみともしけちとしへぬるかとなく聲をきけ（家本終句なくこゑをきけ）

かのいたる返し

いと哀なくそきこゆるともしけちきゆるものとも我はしらすな（時本終句われはしらすや家本ともしひのきゆらんことを名本三句ともしひの）

あめのしたの（名本此上ニとなんかへしたりけるトアリ）いろこのみのうたにては（名本て文字ナシ）なをそ（家本なをこそ）ありけるいたるはしたかふかおほちなりみこのほいなし（御本此一段ナシ家本はいなく名本いたる以下ナシトアリ）むかしわかきおとこけしうはあらぬ女を（御本けしうあらぬ人を家本女ヲ人ニツクル）おもひけりさかしら（家本さかしらする）おやありておもひもそ（御本を文字ナシ）つくととてこの女をほかへをひ（御本家本をり二字ナシ）やらんとす（御本なんといふ）ささこそいへまたをひやらす（御本此詞ナシ時本はたヲいはたニツクル家本いへとトアリ名本いへともをひすてす）ひとのこなれはまた心（御本又ナシ心のアリ家本こと心）いきをひなかりけれは（御本いきをひなくて名本はた心ヒ下ナシ）とゝむるいきをひなし（御本えとめす）女もいやしけれはすまふちからなし（家本ちからもなし）さるあいたに（御本此詞ナクさこそいへはたえやらすなるあいたにトアリ名本此詞ナシ）おもひはいやまさりにまさる（名本はさりけりリ）にはかにおや此女ををひうつ（御本にはかにナシ名本この女を遂にをひすつトアリ家本この女ををふト有）おとこちのなみたをなかせとも（御本をとせと家本も文字ナシ）とゝむるよしなし（御本といはるちからなし家本さいふるよしなし名本といはるよしもなし）ゐて出ていぬ（御本ついにいぬれは家本さてゐて出ぬ名本さるあいたにゐて出ていなんとす）おとこなくなくよめる（御本此詞ナクテ女かへし人につけていつこまでをくりはしつと人とはしあかぬわかれのなみたかなさておとこなく〳〵よめるトアリ家本なをよめるトアリおとこなく〳〵ナシ）

出ていなはたれかわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも（御本初句いとひては終句けふはかなしなトアリ）

リ家本初句いとひては名本初句同し一説出ていなはトアリさて此次二女かへしに
ついていつくまてをくりはしつと人とはゝあかぬわかれのなみた川まてトアリ

とよみてたえいりにけり名本たえい　おやあはてにけりなをおもひてこそ御本なをたゝ家本名本なをさりにこそ　いひしかいとかくしも家本かふし　あらしとおもふにしんしちに御本家本まことに名本かトアリしんしちに五字ナシ　たえ入にけれは御本たえ入れは　まとひて顔たてけり御本顔なと立けり家本大顔をたてけり　けふのいりあひはかりにたえ入て名本入あひはかりより　またの日のいぬのときはかりになん家本卯のときトアリ名本はかりにナシ　からうしていきいてたりける名本けりニツクル家本此間女かへる人につけていつくまてをくり家本初句いとひては名本初句同し一説出ていなはトアリさて此次二女かへしに
ついていつくまてをくりはしつと人とはゝあかぬわかれのなみた川まてトアリ

たえ入れは　むかしのわかうとは御本昔のわかおとこは家本かゝる名本むかしのわかき人は　むかし女はらからふたり有けりひとりはいやしきおとこのまつしきひとりはあてなるおとこ御本あてなるおとこのとくある家本ひとりはあてなるおとこのとくあるいまひとりはいやしきおとこのまつしきいやしき男もちたる時本いやしきおとこもちたゝ家本此詞ナシ名本いやしき男もたる女　しはすのつこもりに家本つこもりにころに　うへのきぬをあらひすてつからはりけり名本みつからはりけり　こゝろさしはいたしけれとさるいやしきわさもならはさりけれは御本いたしけれと本はさるわさもならはさりけれは家本名本ろへ本未さるいやしきわさもならはさりけれはうへのきぬの家本名本ろへの三字ナシ　かたを名本たもとをはりやりてけり御本はりさきてけり　せんかたも家本も文字ナシ　なくてたゝなきに御本たゝナシなきにのみトアリ　なきけり是をかのあてなる家本なあてなるナシおとこきゝていと心くるしかりけれは家本けれはナシいとをしかりて　いときよらなる御本きよけなりける家本いときよけなる

本すけるナシものおもひ　いまのおきな名本今のょまさにしなんや御本家本しなんやは名本此下二時しける名本おもひ三字ナシ　もたりけり御本時本もちたりけり家本もちたるか　いやしきおとこもたる御本そのいやしき男もたる女　うへのきぬをあらひすてつから

名本いと二字ナシ　ろうさうのうへのきぬを御本四位のろうへのきぬたしかたときに家本たしかたときに名本六位のろうへのきぬたしかたときに　見出てやるとて御本やるとてナシ

紫のいろこき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける家本野なる草木も

むさしの丶心なるへし

四十二　昔おとこ名本有けり　いろこのみとしる〳〵女をあひいへりけり御本あひしれり家本あひしりたりけり　されと御本家本ナシ名本さりけれは　にく丶はたあらさりけり御本にくしもあらさりけれとも家本にくしはあらさりけれは名本此一句ナシ　しはしはいきけれと御本此詞ナシ　なをいとうしろめたく御本なをいとうたかひうしろめたなし家本いと二字ナシ　さりとて御本此四字ナシ家本さりとては　いかてはたえあるましかりけり御本名本此詞ナシ時本けるニツ　なをはたえあらさりける中なりけれは御本此詞ナクテそへにいとたしにはあらさりけり時本此詞ナシ家本同し名本なを二字ナシはたの下ニいかてかはトアリクル家本いかてはあらさりけり　ふつかみかはかり御本みかナシ名本はかりナシ　さはる事ありて御本此詞ナシ　えいかてかくなん御本家本え文字ナシ

いて丶こし跡たにいまはかはらしをたかよひちといまはなるらん御本家本いて丶ゆくあとたにいまはた御本三句かはかぬに

ものうたかはしさに時本物のトアリ名本物字ナシ　よめるなりけり家本よめるとなん名本なるへし家本此次若やでしノ段ニツ丶ク

四十三　むかしかや御本家本かやう　のみこと申すみこおはしましけり御本家本おはしまさしナシ　そのみこ女をおほしめして御本おはしめしてナシ家本相本おはして　いとかしこうめくみつかうたまひけるを御本めくみナシめしつかひたまひけり家本つかひ給ひけり名本めくノ下ニついトアリ　人なまめきて御本名本相本人ヲ取ニツクル　有けるを御本此下わかき人はゆるさしりけり名本此詞ナシ　われのみとおもひけるを家本われのみ已下ナシ　また人き丶つけてふみやる名本此下ニとて二字アリ　ほと丶きすのかたをかきて御本つくりて

ほと丶きすなかなく里のあまたあれは猶うとまれぬ思ふものから

といへり（御本けり家本此句ナシ）この女けしきをとりて

名のみたつしてのたをさは猶たのむいほりあまたとうとまれぬれは（御本けさうなくいけりあはたに家本けふそなくいけり）

（あたなに名本同し）

ときはさ月になん有ける（御本有けれはおとこかへし（御本おとこ又かへし家本かへしナシ）

（四十四）むかしあかたへ（家本おとこあつまへ）ゆく人に馬のはなむけせんとてよひて（御本よひわたりけるに）うとき人にしあらさりけれは家とうしに（御本家本家とうしして名本家第子トカケリ）さかつきさゝせて（御本さゝせなとして）女のさうそく（家本を文字アリ名本なと二字アリ）かつけんとす（御本かつく名本かつけんとて女にあひかはりて）あるしのおとこうたよみて（御本家本うたをよみて）ものこしにゆひつけさす

いてゝゆく君かためにとぬきつれは我さへもなくなりぬへきかな（家本二ノ句君をいはふと）

このうたはあるかなかにおもしろけれはこゝろとゝめてよます（名本此下ニは文字アリ）はらにあちはひて（御本このうた已下ナシ此次ニ一段アリ造ヲのす家本心とはりてなんかきつけたるトアリ此次さくはなノ段ニツヽク名本ことあちはひもいてこすトアリ）

むかし宮つかへしけるおとこすゝろなるけからひにあひて家にこもりゐたりけり時はみな月のつこもりなりゆふ暮に風涼しく吹螢なと飛ちかふをまほりふせりて

ゆく螢雲のうへまていぬへくは秋風ふくとかりにつけこせ

四十五 むかしおとこ有けり（御本むかしすきものゝ心は文字有）人のむすめのかしつく（御本をえあり）あてやかなりける（御本心よはくいひいてん事ふ男有けり時本に文字ナシ）うちいてんことかたくやありけん（御本心よはくいひいてん事やかたかりけん家本名本うちいてんノ上ニこゝろよはくトアリ）ものやみになりてしぬへき時に（御本に文字ナシ）かくこそおもひしか（時本かくそおもひし）といひけるを（御本といふに）おやきゝつけて（家本つけ二字ナシ）なく〳〵つけたりければまとひきたりけれと（御本おやきゝつけたりけりはとひきたるはとに家本つけたりけれとトアリなとひ已上ナシ名本けれと三字ナシ）しにけれはつれ〳〵とこもりをりけり（御本しにけれは家にこもりてつれ〳〵とおもてトアリ已上ノ文もナクテくれかたき歟ニツヽク家本つゝ〳〵とこもりをりけり）時はみな月のつこもりいとあつき比ほひに（家本名本によひは文字ナシ）よひは（時本よひには家本によひは）あそひをりて夜ふけてやゝすゝしきかせ吹けり（家本けりナシて文字アリ）ほたるたかう（家本はたるのなれたかく）とひあかる（家本を文字アリ）このおとこみふせりて

ゆくほたる雲のうへまていぬへくは秋風ふくとかりにつけこせ（家本此次ニとなんよみけるトアリ）

くれかたき夏のひくらしなかむれはそのことゝなくものそかなしき（御本おもはぬの段ニツヽク）

四十六 むかしおとこいとうるはしきともありけりかたときさらす（家本かた時もえさらぬ道にいきにけり以下あひおもひけるヨリわかれにけりマテナシ）あひおもひけるを（名本あひ二字ナシ一説如本行）人のくにへいき（相本ゆきニツクル）けるをいとあはれとおもひてわかれにけり（名本いとあはれとおもひてわかれにけりヲみちにわかれにけりニツクル一説如本行）月日へて（家本月日たへて）をこせたるふみにあさましくたいめんせて（家本あさましうえたいめんせて名本かくえたいめんせて）月日の（家本の文字ナシ）へにけること（名本へぬること）わすれやし給ひにけんと（家本したはひぬらん名本に文字ナシいたく（家本いたういと）おもひわひてなん侍る（家本なんへる名本でなんヲついニツクル）よの中の人の心は（家本人のことゝハ）めかるれはわ

すれぬへき物にこそあめれと家本名本文字ナシめいへりけれはよみてやる家本やれりけるめかるともおもほえなくに忘らるゝ時しなけれはおもかけにたつ家本終句おもかけにみつトアリ此次あふなゝの段ニツヽ

ク御本此一段ナシ

四十七

むかしおとこ名本有けりねんころにいかてと家本いかてかと おもふ女有けりされと此おとこを御本家本を文字ナシあたなりときゝてつれなさのみまさりつゝ御本家本ツヽヲテニツクルいへる御本いへるナシ名本いへりける

おほぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえこそたのまさりけれ御本三ノ句きこゆれは

かへしおとこ御本おとこナシ

大ぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありといふものを御本あるてふものを時本ありてふものを家本

四十八

むかしおとこ有けり御本此間ものへゆく人に名本同し むまのはなむけせんとて人を御本人ヲひとひニツク名本人を三字ナシまちけるにこさりけれは家本此下ニ記のとしさたみかはのかみになりてまかりけるときに馬のはなむけせんとてけふとはひなく りけす時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまでみえさりけれはよみてつかはしけるト云文アリ

いまそしるくるしき物と人またんさとをはかれすとふへかりけり

四十九

むかしおとこいもうとのいとおかしけなりけるをみをりて御本いとナシおかしけなるをみて時本をかしけなるをみをりてよめるトアリ名本おかしかりけるをみて相本をかしけなるを

なるきんをしらふとてみをりて家本をかしけな

うらわかみねよけにみゆるわか草をひとの結はんことをしそ思ふ

ときこえけり（御本けれは名本此六字ナシ）　かへし（家本此三字ナシ）

はつ草のなとめつらしきことのはそうらなくものをおもひける哉（家本此歌ナシ此次うつしうへはノ段ニツヽク）

五十

むかしおとこ有けりうらむる（御本うらむるナシ）人をうらみて

とりの子をとをつゝとをはかさぬともおもはぬ人をおもふものかは（御本此歌ノ次ニしら露をけたて千鳥はなかぬとも）

（いかゝたのまん人のこゝろをトアリ）

といへりけれは（御本家本名本女トアリ）

あさ露はきえのこりてもありぬへしたれかこの世をたのみはつへき

またおとこ

ふく風にこそのさくらはちらすともあなたのみかた人のこゝろは（御本人のこゝろや本家あなたのみたの人のこゝろや）

又女かへし（御本又かへし女家本かへし三字ナシ）

ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなりけり

またおとこ（相本かへしトアリ）

ゆく水とすくるよはひとちる花といつれまてゝふことをきくらん（家本名本またなとこ歌一首トナシ）

あたくらへかたみにしける男女の（御本あたにたかひと家本男ナシ）しのひありきしけることなるへし（御本ありきするこをいふなるへし家本ありきするかことなるへし此次もゝとせノ段ニツヽク）

五十　むかしおとこひとの前さいにきく（御本にきく三字ナシ）うへけるに（家本けかし人のせんさいに初うへけるをみて人の家のせんさいに）うへしうへは秋なきときやさかさらん花こそちらめねさへかれめや（御本名本うつしうへは家本初句同シ四ノ句はなこそか）

五十二　むかしおとこ有けり人のもとよりかさな（御本家本相本な文字ナシ）りちまきを（御本家本相本を文字ナシ名本鬘カサリ　蒔マキ）尾をこせたりけるかへりことに（御本をこせたる返事に）

あやめかり君は沼にそまとひける我は野にいてゝかるそわひしき（御本かくそをゝしき家本四ノ句ゝしきにて終句かくそをゝしき）

とて（名本といひて）きしをなんやりける（家本此拾一字ナシ）

五十三　むかしおとこ（御本男トカケリ）あひかたき女にあひて（御本有かたかりける女にトアリあひて三字ナシ家本モあひてナシ名本男有けりあひかたかりける女に）ものかたりなと（名本なとナシ）するほとに鳥のなきけれは

いかてかは鳥のなくらん人しれすおもふこゝろはまたよふかきに（御本初句いかてかく時本三ノ句人しれぬ名本三ノ句人しらず）

五十四　むかし男つれなかりける女にいひやりける（御本けり家本いひつかはしけるゆきやらぬ夢ちをたとるたもとにはあまつ空なる露やをくらん（御本あまつそらなき此次わか袖は段ニツヽク時本露ををくらん）

五十五　むかしおとこ（家本名本女ヲ人ニツクル）おもひかけたる女の（家本いうましろ名本久文字ナシ）えうましう（家本ましろ）なりてのよに

おもはすはありもすらめとことのはの折ふしことにたのまるゝかな（御本此一段ナシ家本下句なもふしことにたのまれしか）

五十六 むかし男ふしておもひおきておもひ（御本家本おもひ三字ナシ）おもひあまりて

我袖は草のいほりにあらねともくるれは露のやとりなりけり（御本家本名本終句やとりとそなる）

五十七 むかしおとこ（御本家本男ナシ）人しれぬものおもひけり（御本思ひけるおとこ　家本おもふおとこ）つれなき人のもとに（御本女のもとに）

こひわひぬあまのかるもにやとるてふ我から身をもくたきつる哉（家本あまのかるてふもにやとる此次ちはやふる神のいかき）

五十八 むかし心つきて（ノ段ニツヽク）色このみ（御本て文字ナシなを色このみトアリ名本昔榮而）なる（家本なりける）おとこなかをかといふ所にいへつくりてをりけり（家本家つくりしてすみけり）そこのとなりなり（御本なり二字ナシ）ける宮はらにこともなき女ともの（御本女とも有たり）ゐなかなりけれは田からんとて（御本田からすとて）此おとこのあるをみて（御本この男みをりけるに）いみしのすきものゝしわさやとてあつまりて（御本て文字ナシ）いりきけれは（暗本たれは家本いりナシ）此男にけておくにかくれにけれは女（御本おくにけいりにけり女かく名本同シ家本かくれにけり）

あれにけりあはれいくよの宿なれや住けん人のをとつれもせぬ（御本をとつれもせす）

といひて（家本ゐてあり四字ナシ）（御本ゐてのみひけれは）このみやに（御本たのみやにナシ）あつまりきゐてあり（家本このみや已下文ナシ）けれはこの（御本この二字ナシ）おとこ

むくら生てあれたる宿のうれたきはかりにもをにのすたく成けり（御本をきのすたく家本初句て文字ナシ三句さひしきは名本うれたきに）

とて（御本とハひて名本て文字ナシ）なんいたしたりけるこの女ともほひろはんといひけれは（家本いひたりけれは）

うちわひておちほひろふときかませは我も田つらにゆかましものを（御本五月まつノ段ニツ、ク）

むかしおとこ（名本有五十九）京を（御本みやこを）いかゝおもひけんひんかし山にすまむとおもひいりて（御本いきて家本いりナシ）

すみわひぬ今はかきりと山さとに身をかくすへきやともとめてん（御本家本今はかきりの）

かくて物いたく（家本いたろ）やみて（御本なんとよろをりけるにものしいたろやみて）しにいりたりけれはおもてに水そゝきなとしていきいてゝ

我うへに露をくなる天河とわたるふねのかいのしつくか（家本しつくにトアリ相本露をくらん）

となん（御本家本なんナシ）いひて（御本いひてそ）いきいてたりける（御本此末まことにかきりなりける時終にゆくみちとはかねてきしかときのくけふとはおもはさりしをとなんたゑいりにけり家本此次あかねともノ段ニツ、ク六十）

むかしおとこ有けりみやつかへ（御本ハ文字アリ）いそかしく（御本家本て文字アリ）こゝろもまめならさりける（御本けれは）

ほとの（御本位とのナシ家本位とに）いへとうし（御本家とうしと新名本はとにかのいへとうし）まめ（家本二字ともナシ）におもはんといふ（御本いふけるに）人につきて

人のくにへいにけり（家本いきけり）このおとこうさのつかひにていきけるにあるくにのしそうの官人

のめにて（御本て文字ナシ）なんあると（相本ありと）きゝて女あるしにかはらけとらせよさらすはのまし（御本さらはのまんと）いひれはかはらけとりて（御本家本とらせて）いたしたりけるにさかななりけるたちはなを（家本はなたち花をとりて（家本此下つかひの上めるトアリ）

さつきまつ花たちはなの香をかけはむかしの人の袖のかをする

といひ（御本といへり）けるにそおもひいでゝあまになりて山に（御本は文字アリ）いりてそ有ける（御本名本いりにける家本いりてそあなる此次われならて段ニツヽク六十一）

むかしおとこ（御本家本男ナシ）つくしまていきたりけるに（御本に文字ナシ　とこ有けりトアリ）これは色このむといふ（御本このむなる）すきものとの（御本もすたれのうちなる人の家本の文字ナシ）いひけるをきゝて（御本此下ニ　とこトアリ家本いひけれはトアリきゝてナシ）

そめ川をわたらん人のいかてかは色になるてふことのなからん（御本終句ことなかるへき）をんなかへし

名にしおはゝあたにそ有へきたはれしま波のぬれきぬきるといふ成（御本二句あたにそ　もふ家本終句きんといふ也トアリ）

此次さくらはなちりかひくもるノ段ニツヽク六十二

むかしとしころをとつれさり（御本をとろへニツクル家本としころ已下ナシ）ける（家本みける）女（御本家本女こいろ）かしこくやあらさりけんはかなき人のことにつきて（家本つけて）人のくになりける人につかはれて（名本つかはれけるほとに）もとみし人のまへにいてきて物くはせなとしけり（御本ありきけりなかきかみをきぬのふくろにいれてとを山すりのなかきあをゝをきたりけるよさりこの（家本この二字ナシ）ありつる人たまへとあるしにいひけれはをこせたりけり（家本相本ける）おとこ（御本おとこ三字ナシ）われをはしらすやとて（相本しるやとて）

いにしへのにほひはいつらさくら花こけるからともなりにけるかな（御本四句わひるかことり名

本機等

といふをいとはつかしとおもひていらへもせてゐたるを（御本いたりけるを）なと（家本なとて）いらへも（名本も文字はニツクル）せぬといへはなみたのこほるゝに（御本なかるいに）めもみえすものもいはれすといふ（御本いはれすといへはなと家本いはすといふ）

これや此我にあふみをのかれつゝ年月ふれとまさりかほなき（御本名本終句まさりかはなみ家本下句としところふれとまさりかはなみ）

といひてきぬゝきてとらせけれとすてゝにけにけりいつち（御本いつこに名本いつちへ）いぬらんとも（家本も文字ナシ）しらす（家本此次二段アリ是ヲノス）

むかし女をぬすみてゆく道に水のまさんとゝふにうなつきけれはつきなんとゝくせさりけれはてにむすひてくわすゐてのほりにけれはもとのところにかへりゆくにかのみつのみしところにて

おほはらやせかゐの水を結ひつゝあくやとゝひし人はいつくに

といひてきにけりあはれ〳〵

むかしおとこ女をきふしものいふをいかゝおほえけんおとこ

こゝろをそわかなきものに思ひぬるかつみる人やこひしかるへき（此次あちきなく段ニツヽク）

（六十三）むかし世（家本世文字ナシ）心つける（御本心あるトアリ家本心つけりける名本心つきける）女いかてこゝろなさけあらん（御本このなさけある）おとこに（家本に文字ナシ）あひえてしかなと（御本おとこをかたらひてしかな家本え文字ナシ）おもへと（御本とも）いひいてんも（御本にも名本こと）たよりなさに

御本より なければ まことならぬ夢かたりをす子御本せす子 三人をよひて御本家本よひあつめて時本よひいてゝ かたりけり名本子三人已下ナシ ふたりのこはなさけなくいらへてやみぬ家本またトアリ さふらうなりけるこ御本家本と文字ナシ なんよき御男 そいてこんとあはするにこの女けしきいとよしこと人はいと御本家本いとナシ なさけなしいかてかいかてかく このさい五家本五文字ナシ 中將にあはせてしかなとおもふ心あり御本ありけり家本名本て文字アリ かりしありきけるに 御本ありきけるみちに いきあひて御本ゆきあひにけり家本いき文字ナシ名本此五字ナシ みちにて御本家本トモナシ 馬のくちをとりてかう〳〵御本やうなんおもふといひけれはあはれかりてきてねにけり御本きてナシひとよねにけりけり名本いきてねにけり さてのち家本のち二字ナシ おとこみえさりけれは御本おとこ已下ナシおさ〳〵こねはトアリ名本こさりけれは 女名本ナシ おとこのいへにいきてかいまみけるをおとこ家本は文字アリ ほのかにみてみて御本せリ

もゝとせにひとゝせたらぬつくもかみ我をこふらしおもかけにみゆ御時本家本おもかけにたつ名本われをこふらきとて御本名本といひて 出たつ御本家本いてたつ上二馬にくらをかせてトアリ名本同上二馬にくらをきて いへにきてうち御本うちナシ ふせり男家本は女字アリ けしきをみて名本此下ニ女トアリ むはらからたちにかゝりて御本からたちともしらすはしりそとひて家本かいれて いへにきてうち御本うちナシ ふせり男家本は女字アリ かの女の御本このの名本この男かの女の せしやうにしのひてたてりてみれは御本みけれは家本たてりなけきて御本名本うらなけきて 女家本ナシ なけきて ぬとて

さむしろに衣かたしきこよひもやこひしき人にあはてのみねん御本終句あはてわかねん家本あはてかもねん

とよみけるをおとこ御本家本男ナシ あはれとおもひて御本家本あはれとみて そのよはねにけりよの中のれいとしておもふをは御本おもふをはナシ家本おもはをは おもひおもはぬをはおもはぬものを御本おもひおもはぬ人あるをトリ思はぬものを六字ナシ家本おもはす思ふをはぬをは

おもひけるトアリ この人はおもふをもおもはぬをも（御本おもふをおもはぬをもの十一字ナシ　このトアリ）けちめみせぬ（家本みせすとアリ）こゝろなん有ける（家本心文字ナシ　此次おはぬをのひくてあまたの段ニツヽク）

六十四

むかしおとこ（家本女おとこ　相本おとこ女）みそかに（御本此トニ女をトアリ　名本有けり女ひそかに）かたらふわさもせさりけれはいつく（御本家名本いつこ）なりけむあやしさによめる

吹風にわか身をなさは玉すたれひまもとめつゝいるへきものを（御本終句いらましものを家本ドノ句ひまをもとめていらましものを）

かへし（御本かへし女　名本女かへし）

とりとめぬ風には有とも玉すたれたかゆるさはかひまもとむへき（御本二句風にはあれと歌ノ次ニとてやみにけりトアリ家本かへしし下歌トモナシ此次おきのゐてノ段ニツヽク）

六十五

むかしおほやけおほして（御本名本昔みかとのときめき家本みかとのおはえにて）つかふたまふ（御本家本つかはせ玉ふ　家本つかひ給ひける）女の（御本名本の　文字ナシ）色ゆるされたる有けりおほみやすん（御本家本名本　わ文字ナシ）所とて（名本にて）います（御本家本名本　ましまさ）かりける（御本か文字アリ）いとこなりけり（御本御いとこなりけり家本名本相本ける）殿上にさふらひける（御本つかはせ給ひける家本殿上に有ける）在はらなりける（家本此八字ナシ）おとこのまたいとわかゝりけるを（家本を文字ナシ）この女あひしりたりけり（御本男のまた已下文ナシ家本この女をあひしれりけり相本けるトアリ）おとこ（家本おとこナシ）女（名本の文字アリ）かたゆるされ（家本かたいたちいりたち）たりけれは女のある所にきて（御本いきて）むかひをりけれは女（家本も文字アリ）いとかたはなり身もほろひなんかくなせそといひけれは

おもふにはしのふることそまけにけるあふにしかへはさもあらはあれ（家本下句色にはいてしとおもひしものを）

といひてさうしにおり給へれは（御本家本れ文字ナシ）れいのこの（御本此五字ナシいとゝトアリ家本この二字ナシ）み（御本みゑ文字ナシ）さうしには人のみるをもしらて（御本しのはて家本みるもしらす）のほりゐけれはこの女おもひわひてさとへゆくされは（御本ゆきけれは）なにのよきことゝおもひていきかよひけれは（御本ゆきかよふに家本この女已下かよひけれはマテナシ）みな（家本みる）人きゝて（家本て文字ナシ）わらひけりつとめてとのもつかさのみるにくつは（家本くつを）とりておくになけいれてのほりぬ（御本のはりゐて家本のはりて）かくかたはにしつゝありわたるに（御本わたるに）身もいたつらになりぬへけれはつゐにはろひぬへしとてこのおとこいかにせんわか（御本わかノか文字ナシ）かゝる心やめたまへと佛かみにも（家本も文字ナシ名本神佛ニツクル）申けれと（家本けれは名本申せとも）いやまさりにのみ（御本いやまさりつゝ）おほえつゝ（家本おほえつゝ已下のみマテナシ名本於保之而）猶わりなくこひしらのみ（御本こひしきことのみ）おほえけれはおんやうしかんなきよひて（御本かんなきおんやうしゝて家本おほえけれはかうなきをめしよひて名本かんなきおんやうしよひて）こひせしといふはらへのくして（御本みそきのくして家本みそきはらへのくして）なんいきけるはらへけるまゝに時本はらへさせける家本もてきてはらへけるまゝに名本なんはらへける）いとゝ（家本名本いとトアリ）かなしきことかすまさりて（御本家本ことのみかすまさりて）ありしよりけに（家本ありしの上三物にゝすトアリ）こひしくのみ（家本のみ二字ナシ）おほえけれは

こひせしとみたらし河にせしみそき神はうけすもなりにける哉

といひてなんいにける（御本きにける家本いきける相本とないひていにける）このみかとはかほ（御本御かほ性名本とけの御名を二字ナシ）かたちよく（名本御かたちよく）おはしましてほとけの御名を（御本曉には御本家本御文字ナシ）御心にいれて御（家本御文字ナシ）こゑは（名本曉には御こゑ）いとたふとくて（家本て文字ナシ御本たうこの女は御本名本ニツクル）申たまふをきゝて女は（御本名本いたう家本いたく）なきけり（御本家本なけきけり）かゝるきみ

につかうまつらてゝくせつたなく（御本つたなく家本つきなく）かなしきことこの男にほたされてとて（御本とおもひて名本で文字）なんなきけるかゝる程にみかときこしめしつけて（家本つけ二字ナシ）此男をは（御本をは三字ナシ）なかしつかはして（御本て文字ナシ）けれは（名本けり）この（御本あのトアリ家本このナシ）女の（御本名本女をは家本女は）いとこの（家本いとこのナシ）みやす所（名本をも家本トアリ）女をは（御本家本名本女をはナシ）まかてさせてくらにこめて（御本とのゝくらにこめて家本はかてさせ玉ひつちくらにこめて）しをりたまふ（御本家本給ひ時本たまへれは）けれは（時本ナシ）くらにこもりてなく（御本家本名本相本なく〳〵トアリ）

あまのかるもにすむ虫のわれからとねをこそなかめよをはうらみし（家本三句われからに相本終句ねをのみなかめ）

となきをれは（家本なき同シ家本おとこに）此おとこ（御本おとこは相本おとこに）人の國よりよことにきつゝふえを（御本を文字ナシ）いとおもしろく（家本おもしろ）ふきてこゑはおかしうてそ（家本をかしろてそ六字ナシ）あはれに（御本いとおかしくてうたをそトアリ已下そあはれに五字ナシ名本あはれに四字ナシ）うたひけるかゝれは（御本かゝれは四字ナシ名本かゝりけれは卜有）この女は（御本家本は文字ナシ）くらにこもりながらそれにそ（御本そこにそ）あなるとはきけと（御本あなりとはきゝけれと時本あるさはきけと家本は文字ナシ名本あなれときけと相本あなるさはきけと）あひみるへきにもあらてなむ（御本かくなん）有ける（御本此四字ナシ）

さりともとおもふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらすして（御本名本終句身をはしらすて家本たのすらん）

とおもひおり男は（御本男ナシ）女しあはねはかくし（御本とろし）ありきつゝ人のくにゝありきてかく（御本人の國已下ナシ家本かく二字ナシ）うたふ（名本人の國以下文ナシ）

いたつらにゆきてはきぬるものゆへにみまくほしさにいさなはれつゝ（御本二句ゆきてはかへる家本ゆきてはかへる）

せきなれとみまくほしさに

水の尾の御時（御本御時のこと）なるへしおほみやすん所も（御本家本ところは名本所とは）そめとのゝきさきなり（御本そめのゝきさきなり家本なるへし）五條のきさきとも（御本五條已下ナシ家本同シ此次あれにけり本五條ノ段ニツヽク相本とも下ニ中トアリ）

參考伊勢物語　下卷

六十六
むかしおとこつのくにゝしる所有けるに御本有けり　あにのをとゝともたちひきゐて御本ともたちなんとひきゐて　なにはのかたにいきけり御本なにはの已下ナシ　なきさをみれは御本ろみけれは　ふねともあるをみて御本みて二字ナシ

なにはすをけさこそみつの浦ことにこれやこのよをうみわたる舟御本二句けふこそトアリ

これをあはれかりてひと〳〵かへりにけり御本此次順なきてノ段ニツヽク家本此一段ナシ

六十七
昔男せうえう家本ようトカケリ　しにおもふとちかい家本かきはかり三字ナシ　いきけりかうちのくにいこまのやまをみれは家本みやれはくもりみはれみたちゐる雲やますあしたよりくもりてひるはれたり雪家本雪ナシ　いとしろう木のすへに家本雪木のすへ〳〵にふりたり家本こふりたりたり　それをみてかのゆく人の中にたゝひとり家本ひとつ　よみける

きのふけふ雲のたちまひかくろふは花のはやしををしと也けり御本此一段ナシ家本此次はとゝきすノ段ニツヽク

六十八
むかしおとこ御本男トカケリ　いつみのくにへいき御本くに、相本ゆき　けりすみよしの御本つのくにすみよしのの　こほりすみよしのさとすみよし御本すみよし四字ナシ　のはまを御本を文字ナシ　ゆくにいとおもしろけれはおりゐつゝゆく御本ゆくナシ

ある人すみよしのはまとよめといふに御本此下ニ文字アリ

鴈なきてきくの花さく秋はあれと春のうみへに住よしのはま御本時本春はろみへに

とよめりけれはみな人々御本みな人トアリ　よますなりにけり家本此一段ナシ

六十九
むかしおとこ有けりそのおとこ御本そのおとこナシ　いせの國に御本に文字ナシ　かりのつかひにいきけるに御本いきけるを

かの家本このいせの齋宮なりける人のおや御本おやトカケリ家本御おや三條はちこれたかのみこのはしなり つねのつかひよりは此人よく
いたはれといひやれりけれは御本やりけり家本いひおこせたりけれに おやのことなりけれはいとねんころに
いたはりけりあしたにはかりにいたしたてゝやりゆふさりは御本ゆふさりはこゝに家本ゆふへには かへりつゝそこ
に御本つゝそこに五文字ナシ こさりけりかくて御本て文字ナシ ねんころにいたつきけり御本いたはりけるはとにいひつきにける家本いたはりけり 二日と
いふ夜おとこ御本おとこナシ われてあはんといふ女も御本も文字ナシ家本女もてはなれてしもおもはす はたいとあはしともおもへ
らす御本はた已下文ナシ されと家本されとも 人め御本ひとめの家本人めいと しけゝれはえあはすつかひさねとある家本ねね人な
れはとをくもやとさすをんなの御本女の四字ナシ ねやちかく有けれは御本ちかくなん有ける家本有たり 女人をしつめてね
ひとつはかりにおとこのもとにきたりけり御本きにけり家本けりナシ 男はた家本おとこもまたは ねられさりけれは家本ねさられけれは
とのかたを家本を文字ナシ みいたしてふせるに月のおほろなるに御本此下二人のかけするをみれは家本人のかけのしけれはみいたしけれは ちいさ
きわらはを家本を文字ナシ さきにたてゝひとたてりおとこ御本男トカケリ いとうれしくて家本うれしくて わかぬると
ころにゐていりて家本いりぬ ねひとつよりうしみつまてあるにまたなにことも御本うしよつはて物かたらひあるぬはとに ひけりいまたなにことも いとかなしくて家本かなしくて ねすなりにけり
かたらはぬにかへりにけりおとこ御本かたらひあるぬはとに女かへりにけれはおとこ つとめていふかしけれと御本ゆかしけれ家本いといふかしけれは わか人を家本われひとを やるへきにし家本にしも あらねはいと御本家本ナシ こゝろもとなくてまちをれは御本まちをれはみれは 明はなれてしはしあるに御本あるに性とに 女のもとよりこと
はゝなくて

君やこし我やゆきけんおもほえす夢かうつつかねてかさめてか（家本三句ナシ　はつかな）

おとこいと（御本いとナシ家本おとこナシ）これをみていと〳〵いたう（家本ナシ）なきてよめる（御本うちなきてトアリよめる三字ナシ）

かきくらす心のやみにまとひにきゆめうつゝとは今宵さためよ（家本終句よひとさためよ）

とよみてやり（御本よみてやり五文字ナシ）てかりにいてぬ（家本かりていてぬ）野にありけと（御本ありきけれと家本有けれと）こゝろはそらにて

こよひたに人しつめていとゝくあはんとおもふに（御本心はそらにていつしか日もくれなんとおもふはとに）くにのかみ（御本かみのトアリ）い

つきのみやのかみかけたる（御本家本かけたりけれは）かりのつかひありときゝて夜ひとよさけのみしけれは

もはらあひこともえ（御本家本ゑ文字ナシ）せてあけはをはりのくにへたちなんとすれは（御本家本たちぬへけれは）おとこ

も人しれすちのなみたを（御本男も女もなみたを家本男も女もちのなみたを）なかせとえあはす（御本なかせとり逢よしもなし）夜やう〳〵あけな

んとするほとに女（御本家本の文字アリ）かたよりいたすさかつきの（家本さかつきに）さらに（御本らに）うたをかきていた

したりとりて（家本りて二字ナシ）みれは（御本うたをかきて已下文ナシ）

かち人のわたれとぬれぬえにしあれは（御本わたれはトアリ）

とかきてすゑはなしそのさかつきの（家本の文字ナシ）さらに（御本らに）ついまつの（家本つきまつの）すみしてうたの末

を（御本うたの末を六字ナシ家本うたのことりを）かきつく

またあふさかのせきはこえなん（家本せきもトナリ）

とて（御本とて二字ナシ）あくれはをはりのくにへ（御本のくに三字ナシ）こえにけり齋宮は水尾の御時文徳天皇の御女

これたかのみこのいもうと御本書宮は已下文ナシ家本いもうとなり悟子内親王貞観元年ト定トアリ此次をむくとてノ段ニツヽク

七十　むかしおとこかりのつかひよりかへりきけるに御本きゝ文字ナシ　おほよとのわたりにやとりていつきの宮のわらはへに御本わらはゝに　いひかけゝる

七十一　みるめかるかたやいつこそ竿さして我にをしへよあまの釣舟御本かたはいつこと家本時本かたはいつこと家本此一段ナシ

昔おとこいせの齋宮に内の御つかひにてまいれり家本れ文字ナシ　けれはかのみやに三字ナシ家本みやに　すきこと御本すてこと家本こと文字ナシ　いひける女わたくしことにて

ちはやふる神のいかきもこえぬへしおほみや人のみまくほしさに家本二句神のいかきを

おとこ御本をとこかへし

こひしくはきてもみよかしちはやふる神のいさむる道ならなくに御本ありとみてノ段ニツヽク家本おはしはらやをしはの山ノ段ニツヽク

七十二　むかしおとこいせのくになりける女御本家本を文字アリ　又御本又はトアリ　えあはてとなりのくにへいくとて御本家本ゆくとていみしう御本此四字ナシうらみけれは女

おほよとの松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな御本此次おはしらやノ段ニツヽク

七十三　むかしそこには御本家本は文字ナシ　ありと家本は文字アリ　きけと御本きゝけれと　せうそこをたに時本せうそこ家本せうそくをたにも　いふへくもあらぬ女のあたりを家本女のあるを　おもひける御本ありきて男のおもひける

めにはみて手にはとられぬ月のうちの桂のことき君にそ有ける（御本初句ありと見て下句かつらをとこの君にもあるかな家本かつらのこと君は有ける此次なみまよりノ段ニツヽク）

七十四 むかしおとこ（御本なと ことナシ）女をいとう（御本いたく）うらみて

岩根ふみかさなる山はへたてねとあはぬ日おほくこひわたるかな（御本二句かさぬる山は家本此次かへし、あまのすむさとのしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらんトアリ）

七十五 むかしおとこいせのくにゝゐていきてあらんといひけれは女（御本いせのくになりける女にまたもえあはてきてあはんとわりなくいひけれはトアリ女ナシ）うらみけれは女トアリ家本くにしてゐていて

おほよとの はまに生てふみるからに こゝろはなきぬ かたらはねとも（家本二ノ句はまにかりけす相本おほけてふトカ）

下卷

といひてましてつれなかりけれはおとこ（御本なと ことナシ）

袖ぬれてあまのかりほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする（御本四ノ句みるめあふなて）

女

いはまよりおふるみるめしつれなくはしほひしほみちかひも有なん（御本三句つねならは終句かひもあらなん家本つねならはしはみしはまはかひもあらなん）

またおとこ

なみたにそぬれつゝしほるよの人のつらき心はそてのしつくか（御本三句あた人の家本初句なみたには）

よに（御本とのみいひて上にトアリ七十六）あふこと（家本の文字アリ）かたき女になん（御本ことになんトアリ女ナシ此次おはよとのまつノ段ニツヽク家本ことなんトアリ女ナシ此次いにしへはノ段ニツヽク）

むかし二條のきさきのまた（御本またナシ家本いまた）春宮（家本春宮のナシ）のみやすむ（家本社文字ナシ）所と申ける時（御本時ヲ比ニツヽクル家本と申ける時ナシ）氏神にまうて（家本まいり）たまひけるにこのゑつかさに（御本つかふまつりけるこのゑつかさなりける家本つかふまつりけるひやうゑのつかさに）さふらひける（御本此六字ナシ）おきな人〳〵のろくたまはる（御本たまはりける家本人〳〵のみに玉ふ）ついてに（御本ついて）御くるまより（家本御くるまから）たまはりてよみて（家本て文字ナシ）たてまつりける（御本たてまつるトアリける二字ナシ）

大原やをしほの山もけふこそは神代のこともおもひいつらめ（御本二句をしはのまつも此次あかねとりノ段ニツヽク家本初句おははらの終句おもひしるらめ）

とてこゝろにもかなしとやおもひけんいかゝおもひけん（家本いかゝ思ひけんナシ）しらすかし（御本とて已下文ナシ時あはれとやおもふ）

むかし田むらのみかと申す（家本申いる）みかと（家本みかと三字ナシ）おはしましけりそのときの女御たかきこと申みまそ（相本います）かりけり（家本女御きたのこと申御かとみますかりけり）それうせたまひて安祥寺にて（家本その女御うせたまひてあんしやうしにて）みわさしけり人〳〵（家本人のナシ）さゝけものたてまつりけり（家本さゝけものの已下ナシ）たてまつりあつめたる物ちさゝけはかりあり（家本ありけり）そこはくの（家本そこにこの）さゝけものを木のえた（家本のえた三字ナシ）につけてたうのまへにたてたれは山も（家本山もナシ）さらに（家本此下山をトアリ）たうのまへにうこき出たる（家本たうのまへにたてらん）やうになんみえけ

る家本有けるそれを右大將にいまそかりけるふちはらのつねゆきと申いまそかりて家本いますかりトアリて文字ナシかうの家本の文字ナシをはるほとにうたよむ家本うたをよむひとゝをめしあつめてけふのみわさを題にて春のこゝろはへある家本したるうたたてまつらせたまふ右のむまのかみ家本右馬頭トカケリなりけるおきなめはたかひなからよみける家本おきなのめかひてよめる

山のみなうつりてけふにあふことはつの別をとふとなるへし

とよみけるを家本たりけるをいまみれはよくもあらさりけりそのかみはこれやまさりけん家本たりけんあはれかりけり家本此下ニむかしをはかくそ申ける此次ねぬるよの段ニツゝク時本けるトアリ御本此一段ナシ七十八むかしたかきこと御本きたのみこと家本きたのことと申す女御家本女御ナシおはしましけり御本申すいまそかりける田村の御門の御子におはしませその御子トアリ女御ナシうせたまひて家本此下ニのちなゝ七日のみわさ安祥寺にてしけり右大將藤原のつねゆき御本常行といふ人いまそかりけり御本いまそかりけりナシ家本みますかりけりそのみわさにまうてたまひて御本まいり給ひて家本まうてあひてかへさに家本京への山しなのせんしのみこ御本みこの御もとにまいりたまふに家本みこと申おはします御本此五字ナシその山しなの宮に御本に文字ナシたきおとし水はしらせなとしておもしろくつくられたるに御本おもしろうつくれり家本おもしろうつくれるにまうてたまうて家本まうてあひてとしころよそにはつかうまつれと家本はつかうまつれと二字ナシちかくは御本はたかくはいらす家本ちかくはいまたつかうまつらす御本たつかうまつらすナシこよひはこゝにさふらはむと申たまふ御本を文字アリみこよろこひたまふて御本て文字ナシ家本かをひて相本たまうてよるの御ましの御本をましところ家本みけしのまうけ家本を文字アリせさせたまふ御本上ノせ文字ナシさるにかの御本さるにナシこのトアリ大將

家本の文字アリ いて丶御本いて丶ひとに たはかりたまふやうみやつかへのはしめにたゝ御本たゝに家本たゝ二字ナシ なを御本此二字ナシ
やはあるへき三條のおほみゆきせし時御本三條に御行ありし時家本有しとき きのくにの千里のはまに有けるいとお
もしろきいしたてまつれりきおほみゆきののち御本御行の後に家本のちに たてまつれりしかはある人の御本人の
みさうしのまへのみそに家本みちに すへたりしをしまこの御本しまナシこのみと家本しまナシみこの みたまふ君なり御本家本
とりにつかはすいくはくもなくてもて家本もちて きぬこのいしきゝしよりは御本は文字ナシ みる
はまされり御本まさりたり家本まさる これをたゝに御本たゝにてたてまつらはすゝろなるへしとて人〳〵御本に文字アリ家本同シ 歌
よませたまふ右のむまのかみなりける人のをなん御本人よめり家本のをなん四字ナシ あをきこけをきさみてまき
ゑのかたに此うたをつけてたてまつり家本まさつれりける御本あをさ已下文ナシ

あかねともいはにそかふるいろみえぬ心をみせむよしのなければ

となんよめりける御本となんよめりけるナシこのいしはあをきこけをきさみてまきゑをしたらんやうに有ける家本りけ文字ナシ

七十九

昔うちのなかに御本うちの宮に家本ろちの女御に みこうまれたまへりけり御うふやにひと〳〵御本みなひと〳〵 うたよみ
けり御おほちかた御本のかた家本御おちとりかたナシ なりけるおきなの家本おいきの よめる

わかかとにちひろある陰をうへつれは夏冬たれかかくれさるへき御本初句わかもとに家本ちひろある竹をうへけれは

これはさたかす御本貞敏トカケリ のみこ家本の文字アリ 時の人家本の文字アリ 中將のことなんいひけるあにの御本あにの三字ナシ

中納言ゆきひらのむすめのはらなり（御本これはさたかすのみこゆきひらの中納言のむすめのはらなり清和の親王也時の人中將のことなんいひけるトアリ家本あにの已下文ナシ此次わかたのむノ段ニヅ、）

八十

むかしおとろへたる家にふちのはなうへ（家本はなをうへ）たる人有けり（御本此下いとおもしろうさけりけり家本此下ニそのはなのやよひのつこもりにそのひ（御本にその日四字ナシ）雨（御本の文字アリ）そほふるに（家本雨はふるにナシいとおもしろくさきなりけり雨の上におりてトアリ）人のもとへおりて（御本もとにおりて家本おりてナシ）たてまつらすとて（御本家本たてまつるとて）よめる（御本此三字ナシ）

ぬれつゝそしゐて折つる年のうちに春はいくかもあらしとおもへは（御本三句藤のはな家本下句春はけふをしかきりとおも）

八十一

むかし左のおほいまうちきみいまそかりけり（御本いまそかりける）加茂河のほとりに（御本に文字ナシ家本いせそ已下文ナシ）六條わたりに家を（御本わたりに家ナシ家本九條の里に家をいとおもしろくつくりて（家本いとおもしろくナシはたなくつくりてトアリ）すみ給ひ（家本給ひナシ）けり神な月の（家本の文字ナシ）つこもりかた（御本かたに家本かたナシ）きくのはな（家本の文字アリ）うつろひ（御本て文字アリ家本うつろへる）さかりなる（家本なるナシ）にもみちのちくさにみゆるおり（御本さかりなるにもみちの已下文マテナシ木くさのいろちくさなるころトアリ家本もみちの已下文ナシ）みこたちおはしまさせて夜ひとよ（御本家本夜ひとよナシ）さけのみし（御本し文字ナシ）あそひてよあけもて（御本家本もて二字ナシ）ゆくほとに（御本ゆくほとに家本はとナシ）このとのゝおもしろきを（御本おもしろきよし）ほむる（家本に文字アリ）うたよむ（御本に文字アリ）そこに有ける（御本そこなりける）かたゐおきなたいしきのしたに（御本おきなたいしきのしたを若人によませていいたしきのしたを）はひありきて人にみなよませはてゝ（御本人に已下文ナシ家本よはてゝトアリ）よめる

しほかまにいつかきにけんあさなきに釣する舟はこゝによらなん（御本家本つりするふねの）

となん（御本家本なんナシ）よみける（御本とよめるは）　みちのくにゝいきたりけるにあやしくおもふ（家本所トノミアリ）ところ〳〵おほかりけり（家本おはかりき）　わかみかと六十餘國の中にしほかまといふ所にゝたるところなかりけりされはなん（家本なん二字ナシ）かのおきな（御本も文字アリ）　さらにこゝを（御本此句ナシ）めて（御本めてゝしか）ゝよめるなり　しほかまにいつかきにけんとよめりける（御本いつか已下文ナシうきしなのかたをつくれりけると已下トアリ此次おきなさひノ段ニツヽク家本よめる也けりトアリ已下雨のいみしうかへしの歌マテアリ此次おきなさひノ段ニツヽク）

雨のいみしうふりくらしてつとめてもなをいみしうふるにある人のかりやりし

ふりくらし〳〵つる雨の音もせてつれなき人の心ともかな

かへし

八十二　やゝもせは風に隨ふ雨の音をたえぬ心にかけすもあらなん

むかしこれたかのみこと申すみこ（家本みこナシ）おはしまし（家本おはしナシ）けり（御本むかしこれたかとき　こゆるみこおはしけり）山さきのあなたにみなせと（御本水無瀬トカケリ）いふ所に宮有けり年ことのさくらの花さかりには（御本さかりにかしこ　なんかよひ玉ひける）その宮へ（家本かしこへ）なんおはしましける（御本その宮已下文ナシ）そのとき右のむまのかみなりける人を（御本を文字ナシはいりつかふなつり）つねにゐて（家本おはしましける已下つねにゐてマテナシ）おはしましけり時（家本おはしけりそのとき）世へてひさしく（家本世をへてひさしう）なりにけれはその人の（家本の文字ナシ）名わすれにけりかりはねんころにもせてさけをのみのみつゝやまとうたにかゝれりけり（家本けりナシ）今かりするかたのゝ（御本時世へて已下文ナシ家本の文字ナシ）なきさの家その（御本家その家本同シ時

本なきさのゐんそのゐんの櫻ことにおもしろし（御本おもしろくさけり家本おもしろく）そのの（御本そのナシ）木のもとにおりゐてえたを（家本を文字ナシ）おりてかさしにさ（家本さ文字ナシ）してかみなかしも（御本かみなかしもナシ家本なかナシ）みなうたよみけり（御本みなうたよみけり家本若ナシうたよみけりトアリ）うまのかみなりける人の（家本の文字ナシ）よめる（御本よめりナシ）

よの中にたえてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし（御本時本三句さかさらは）

となんよみたりける（御本此九文字ナシ）また人のうた（御本のうた三字ナシ）

ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれうきよに何かひさしかるへき（御本あはれなれ何かうきよにトアリ家本となん已下歌マテナシ）

とて（家本とよみて）そのこのもとはたちて（家本きのもとにトアリて文字ナシ）かへるに日くれになりぬ御とものなる（御本とて已下文ナシ已下まかし）

むかしをなしみこかたのにかりしありきたまひけるに石馬頭なりける人をかならす御ともにゐてありきたまひけりれいのことありきたまふに

人（御本こさけをもたせて（御本かめにさけを入てトアリもたせてナシ）野（家本の文字ナシ）よりいてきたり（御本野にもていてたり）この（御本このナシ家本その）さけを（御本この三字ナシ）のみてんとて（御本のんとて）よき所を（御本家本きよき所トアリ）もとめゆくにあまのかはといふところにいたりぬみこに（御本みこにナシ）むまのかみおほみきまいるみこの（家本の文字ナシ）の玉ひけるかた野をかりてあまの河のほとりに（御本あたかはらに）いたるを題にてうたよみてさか月はさせとのたまう（家本相本のたまひ）けれはかの（御本家本かのナシ）むまのかみ（御本此五字ナシ）よみてたてまつりける（御本たてまつれり）

かりくらしたなはたつめにやとからんあまのかはらに我はきにけり

みこうたを（御本とき乙久けれはこのうたをみこ家本みここのうたを）かへすゝすし（御本詠トアリ）たまうて（家本たまひてかへしえ家本かへしは）したまはすきの有つね御ともにつかう（家本う文字ナシ）まつれり（御本さつりたりけるかそれは（御本それはナシ家本それかかへし

ひとゝせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思ふ（時本家本三句君なれは）

かへりて宮にいらせたまひぬ夜ふくるまてさけのみ物かたりしてあるしのみこゑひていり給ひ（時本て文字アリ）なんとす十一日の月も（御本十日あるりのつきかくれなんとすれは（御本それはナシ）かのむまのかみのよめる（御本むまのかみなりける人のよめる）

あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん（家本かへりて宮に已下文此歌トモナシ）

みこにかはりたてまつりて（御本たてまつり五字ナシ）きの有つね

をしなへて峯もたひらになりなゝん山の葉なくは月もいらしを（御本終句月もかくれしなん家本峯はかひらはかりはけり終句月）

八十三（もかく れしゆ）

むかしみなせにかよひたまひし（御本家本たまふ）これたかのみこれいのかりしにおはしますともに（御本しあり家本御ともに）おきなつかう（家本う文字ナシ）まつれりひころへてみやにかへりたまふけり（御本たまひにけり家本かへらせかりへり）御をくりしてとくいなんとおもふにおほみきたまひろくたまはんとて（御本たまはせんとて）つかはさゝりけり（御本さりけれは）この（御本家本このナシ）むまのかみ（御本此五字ナシ）こゝろもとなか

りて（御本なくて）

まくらとて草引むすふこともせし秋のよとたにたのまれなくに（家本三句ともおはし）

とよみける時は（御本よみけれはトアリ時はナシ）やよひのつこもりなりけりみこおほとのこもらてあかしたまひて（御本て文字ナシ）けりかくしつゝまうて（御本まいりトアリ家本同シ）つかうまつりけるを（家本けるに）おもひのほかに御くーおろし（御本家本おろさせ）たまうてけり（御本給ひてをのといふ所にすみ給ひけり家本たまひけり）む月におかみたてまつらんとて小野に（御本小野にナシ）まうてたるにひえの山のふもとなれは（相本なりけれは）雪いとたかしゐてみむろにまうて丶（家本まいりて）おかみたてまつるにつれ〳〵といと（家本いとナシ）物かなしくて（御本かなしくて）おはしましけれはやゝひさしく（御本ひさしろ）さふらひていにしへのことなと（家本てとともなと）おもひいて（御本家本いてい）きこえけり（御本きと えさせ）さてもさふらひて（家本て文字ナシ）しかなとおもへと（御本とも家本おもへらん）おほやけことゝも（御本と文字ナシ家本おはやけことの）有けれは（御本あれはけれは）えさふらはてゆふ（御本ゆふ二字ナシ）くれにかへるとて（御本家本此下ニよめるトアリ）

わすれては夢かとそおもふ思ひきや雪ふみ分てきみをみんとは

とて（御本家本とよみて）なん（御本なんナシ）なく〳〵きにける（御本なく〳〵かへりにけり家本此次ニまかしおはとれはより つかふまつりけるを人見ニツヽク）

八十四

むかしおとこ有けり身はいやしなからは丶なんみやなりける（御本はゝみこなりけり家本はゝはみこ也けるる）そのは丶なかをかといふところにすみたまひけり（家本すまひけり）こは京にみやつかへしけれはまうつとしけれとしは〳〵（御本もトアリ）えまうてすひとつこに（御本ひとり家本しは〳〵えまうてすナシひとゝころトアリ）さへ有けれはいとかなしう（相本かなしく）し

たまひけりさるに御本さるはとに家本さるにナシしはすはかりにとみのことゝて御ふみあり家本有けり おとろきてみれはうたあり御本うたありしこと〳〵はなくてトアリ家本うたのみありトアリ

をいぬれはさらぬわかれの有といへはいよ〳〵みまくほしき君かな御本家本さらぬわかれも

かのこいたうちなきてよめる御本かのこ已下文ナシ家本同シ御本となん有けるこれを今に用ゐもりあへすはいると て道すからなもひけるトアリ家本とありけれはすなにものりあへすはいるとてうちなき て道すからなもひけるトアリ

世中にさらぬ別のなくもかな千代もといのる人の子のため御本四句千代ともたのむ家本二句さらぬ別も四句よとも又なけく此次今まてノ段

八十五、ク

むかしおとこ有けりわらはよりつかうまつりけるきみ御くしおろしたまふてけり御本此間もとしとてトアリ むかしの心うしなはむ月にはかならすまうてけりおほやけの御本の文字にニツクルみやつかへしけれはつねにはえまうてす家本つねにもつかうまつらすされともとの心うしなはてまうてけるになん有ける御本つねには已下文ナシしはしはもえまらすはかりはかはらさりけれはなうてたるにはたたトアリ家本されともとしころをうらなはてなうてたるになん有けるトアリ已下むかしヨリ別段トセリ むかしつかうまつりし人御本家本の文字アリそくなるせんしなる御本法師なる家本そくなるをしなるとて おほみきたまひけり家本たまへり相本たまへりけり雪こほすかこと御本ことく あまた御本あまたナシまいりあつまりて陸月なれはことたつとて御本こたへとて家本ことさらとて ふりてひねもすにやますみな家本みなナシ人名ひて雪にふりこめられたりといふを御本ふりこめられたるを家本を文字ナシたいにて歌有けり御本有けりナシよなんとゝぶにトアリ

おもへとも身をし分ねはめかれせぬ雪のつもるそわかこゝろなる御本三句めはかれぬ家本三ノ句みはかれぬ

とよめりけれは（家本とよみけれは）みこいといたうあはれかりたまふ（御本たなふナ家本たなひて）御そぬきてたまへりけり（家本かつけたよひけり此次若ぬれはノ段三ツ、ク八十六）むかしいとわかきおとこわかき女を（家本を文字ナシ）あひいへり（家本あひはへり）けりをのくおや有けれはつつみていひさしてやみにけり（御本やみにナシ）としころへて（家本としをへて）女のもとに（御本家本女のかたより）なをこゝろさしはたさんとやおもひけん（御本家本こゝろさし已下文ナシ御本このことゝけんとこのことゝけれは家本このことゝけれとなんいへりけれは）おとこうたをなむ（御本家本をなんナシ相本なんナシ）よみてやれりけり（御本此ドいかゝおもひけん家本やりけり）

今までにわすれぬ人は世にもあらしをのかさまくとしのへぬれは（家本三ノ句わすれし人は）とて（御本とてやいひてやみにけり（家本とてやみにけりナシ）おとこも女も（御本男女の家本も文字ニツトモナシ）あひはなれぬみやつかへになん出にける（御本出たちける家本出立にける此次ゆく性たるノ段三ツ、ク八十七）むかしおとこつのくにむはらのこほりあしやのさとにしるよしゝて（御本しるよしゝてしありて）いきて（御本家本此三字ナシ）すみけりむかしのうたに

あしのやのなたのしほやきいとまなみつけのをくしもさゝすきにけり

とよみけるそ（御本家本とよめるは時本よみけるは）このさとをよみける（御本よめるなり家本よめる也けり）こゝをなんあしやのなたとはいひける（御本けりこのおとこなまみやつかへしけれはそれをたよりにて（御本にてナシ）衛う（御本家本相本ゑふ）のすけともあつまりきにけりこのおとこのこのかみも（御本家本あにも）ゑふのかみなりけりその家のまへの（御本なへのナ

シ海のほとりに家本のほとり四字ナシあそひありきていさこの山のかみに御本ウへに有といふぬのひきのたきみにのほらんといひてのほりてみるにそのたきものよりことなり家本もつよりこと六字ナシなかさ御本時本たかさ二十丈ひろさ五丈はかりなる御本二十餘丈はかりひろさ五丈餘はかりある家本たかさ二十丈餘ひろはかりひろさ五丈はかりある いしのおもてにしらきぬにいはをつゝめらん御本しろきゝぬにいしをつゝみたらん家本しろきゝぬ六々トアリ やうになん有けるさるたきのかみにわらうたのおほきさして御本わらうたはかりにて さし家本ナシ出たるいしありそのいしのうへにはしりかゝる水は御本は文せうこうし御本此下はかりの三くりの御本此三字ナシ おほきさにてこほれおつそこなる家本おつるをかしこなる人に家本に文字ナシ みなたきの御本此五字ナシ うたよますかの御本家本この御本ナシ 衞ふのかみまつよむ

わかよをはけふかあすかとまつかひのなみたの瀧といつれたかけん御本下句は文みたの玉といつれはさまれり家本終句いつれ

あるしつきによむ御本つきにあるしよむ

ぬきみたる人こそあるらししら玉のまなくもちるかそてのせはきに御本二ノ句人こそあるらめ

とよめりけれはかたへの人家本此下二これを わらふこと御本にとナシにや有けんこのうたに御本うたをよみて家本このうたに五字ナシ めてゝやみにけり御本めてゝナシやみけりトアリ かへりくる道とをくてうせにし宮内卿もちよしか御本もとよしか 家のまへ時本を文字アリ くるに御本すくるに家本くるさに日くれぬやとりのかたをみや家本や文字ナシ れはあまのいさり火御本家本相本いさりする火おほくみゆるにかの御本みるにとの家本このこの あるしのおとこ家本をこの よむ

はるゝ夜のほしか河邊の螢かもわかすむかたのあまのたく火か（家本二句仕しかさは一の）

とよみて家に（御本家にナシ　みなとアリ）かへりきぬそよ南の風ふきて波いとたかし（御本なとりの波いとたかし家本なみなとたかし）つとめてその家のめのこともいてゝうきみるのなみによせられたる（御本字アリを文）ひろひて家の内にもてきぬ（御本の内ナシ家本うきみる以下ノ文ナシ）女かたよりそのみるを（家本たのナシうきみるをなみのよせたるをトアリ）たかつきにもりてかしはを（御本を文字ナシ）おほひていたしたる（御本たりそのナシ）かしはにかけり（御本かくかけり家本かけりナシ）

わたつ海のかさしにさすといはふもゝ君か爲にはおしまさりけり（家本初句わたつみの下句君かためにそおしまさりけり此次秋かけてノ段ニツ、ク）

ゐなか人のうたにては（家本て文字ナシ）あまれ（家本れ文字ナシ）りやたらすや（御本此次人しれすノ段ニツ、ク八十八）

むかしいとわかきに（御本わかき人に家本わりなき人に）はあらぬ（家本此下三人トアリ）これかれともたち（御本家本ともの）あつまりて（御本あつまりてナシ時本あつまりゐて）月をみて（御本みけるに）それか中にひとり（御本家本れ文字ナシ）

大かたは月をもめてしこれそ此つもれは人のおいとなるもの（御本此次ゐふみなるノ段ニツハ、ク家本初句あちきなく此次さ月をつノ段）

むかしいやしからぬおとこわれよりは（御本それよりは家本は文字ナシ）まさりたる人を（御本を文字ナシ）おもひかけて年へ（御本へにけり　用本へにける八十九ニツ、ク）

ける

人しれすわれ戀しなはあちきなくいつれのかみになきなおほせん

九十　むかしつれなき人をいかてとおもひわたりけれは（御本思ひこひわたりけれは時本こひわひけれは）あはれとやおもひけん
さらは（家本ら文字ナシ）あすものこしにてもと（御本あすものこしにてものはかりをいはんと家本あすものこしにてものはいはんと）いへりけるをかきりなく
うれしく（御本うれしなから家本うれしかる）またうたかはしかり（家本かりナシ）けれはおもしろかりけるさくらにつけて

さくら花けふこそかくもにほふともあなたのみかたあすのよのこと（家本三句にはふらめ）

といふ心はへ（家本はへナシ）もあるへし（御本も文字ナシあるらしトアリ）

九十一　むかし月日のゆくを（御本を文字ナシ）さへなけくおとこやよひ（御本やよひの家本三月の）つこもりかたに（御本かた二字ナシ）

おしめとも春のかきりの今日の日の夕暮にさへ成にける哉（御本をしめともトカケリ）

九十二　むかし（相本男トアリ）こひしさにきつゝかへれと女にせうそこ（家本せうそく）をたにえせて（御本もたせて家本をとらせて）よめる

あしへこくたなゝしをふねいくそたひゆきかへるらんしる人もなみ（御本下句こゝかふるらんしる人なしに家本しる人をなみ此次みすもあらすノ段ニツヽク）

九十三　むかし男身はいやしくていとになき（御本いやしなからふたつなき家本ひんなき）人をおもひかけたりけり（御本かけめりけり家本かけたりナシ）す
こしたのみぬへきさまにや（家本に文字ナシ）有けんふしておもひおきておもひおもひわひて（御本わひ二字ナシ）よ
める（家本おきておもひ已下ナシれてよめるトアリ）

あふなく思ひはすへしなそへなくたかさいやしきくるしかりけり（御本三ノ句なのめなくイ付ニにけもなく）

むかしもかゝることは（御本家本は文字ナシありけりトアリ）世のことはりにや有けん（御本此次ひこはしの段ニツヽク）

九十四
昔男女有けりいかゝありけんその（家本かの）おとこすますなりにけりのちにおとこ有けれと子ある中なりけれはこまかにこそあらねとときく〳〵ものいひをこせけり女かたにゑかく人なりけれはかきにやれりけるを（家本かきにおこせたるを）いまのおとこの物すとてひとふつかをこせさりけり（家本ひとひふつか六字ナシうたをこせたりけりトアリ）かのおとこいとつらくをのかきこゆることをは（家本は文字ナシ）いまゝてたまはねは（家本たなはぬは）ことはりとおもへと（家本とり）猶人をはうらみつへき物に（家本に文字ナシ）なん有ける（家本む有ける四字ナシ）とて（家本と申て）ろうして（家本此四字ナシ）よみてやれ（家本れ文字ナシ）りける時は秋になん有ける

秋のよは春日わするゝ物なれや霞に霧や千重まさるらん（家本たちまさるらん）

となんよめりける女（家本となん已下文ナシ）かへし

ちゝの秋ひとつの春にむかはめやもみちも花もともにこそちれ（家本千々の春ひとつの秋に此欠き所ノぶけぶノ段ニツヽク御本此一段シナ）

九十五
むかし二條のきさきに（御本きさきのみやに）つかうまつる男ありけり女の（家本文女トアリ文字ナシ）つかうまつるを（御本つかうまつれりけるを家本なつりけるを）つねに（御本つねにナシ）みかはしてよはひわたり（家本わたりナシ）けりいかてか（家本いかてか）物こしにたいめんしておほつかなく（御本おほつかなくナシ家本おはつかなくナシ）おもひつめたること（御本ことは家本たとも）すこしはるかすむと（御本はるけさんと）いひけれは女いとしのひてものこしにあひにけり（家本ものこしに七月七日あひたりけり）物かたりなとして（御本家本なんとして）おとこ

ひこほしにこひはまさりぬ天河へたつるせきを今はやめてよ（御本二句とひはまさりぬ）

このうたにめて丶御本家本でれをおかしとやおもひけんトアリこのうたにめて丶ナシあひにけり家本以下一段アリこれをのすむかし西院といふところにすむ人有けりいろになん出たりける女車の有けるにいひつきにけりとかくおかしきことなんといひつきて御すみかはいつくそといひけれはかくなんいひける

わか家は雲ゐの峯したかけれはおもふともこん物ならなくに

おとこ

かりそめにそむる心しまめならはなと丶雲ゐもたつねさるへき

といひてわかれにけり此次われみても

九十六

昔おとこ有けり女を家本を文字ナシとかくいふふいふ御本とかことと家本ことナシはとにトアリ月日へにけり御本家本此下二女トアリいは木にしあらねは御本ならねに家本岩木にしも心くるしとや御本此句ナシをしらやトアリいとおもひけむやうくあはれとおもひけり御本家本あはれとナシ思ひつきにけりトアリそのころみな月の家本の文字ナシもちはかりなりけれは御本つこもり本身にかさはかりなり女身にかさ御本女かさも時本身にかさも ひとつふたついてきにけり御本ひとつふたつ身にいてたりけれは家本女身に已下ノ文ナシ御本女ナシ家本女の女こゝろもなし身にかさもひとつふたついてたり御本いてきにけり家本いてきたり時もいとあつしすこし秋風吹御本家本吹ナシたちなん御本たていま時かならす御本此六字ナシあはんといへりけり家本けりナシ秋まつころをひに御本さて秋まつはとこゝかしこより御本此七字ナシその人のもとへ御本女のちゝその人のもとに家本その人はその人のもとへいなんすなりとて御本いくへかなりときしていひのゝしりて家本いなんとす

なりくせちいて（御本くせて）きにけりさりけれは女（御本時本このせうとにはかにむかへにきたりされは の女トアリ）とて（御本きたりけれは家本女の已下文ナシ）この（御本この二字ナシ）女かえてのはつ（家本はつ二字ナシ）もみちをひろはせて（御本ひろひて）うたをよみて（御本此六字ナシ家本を文字ナシ）かき（御本かきをく）付てをこせたり（御本此一句ナシ家本たるトアリ）

秋かけていひしなからもあらなくに木のはふりしくえにこそ有けれ（御本二句いひしなかには家本同ちきりしなかに）

とかきをきて（御本とみせて）かしこより人をこせはせたらは（御本をこせたおとも汁すなりぬ）さてやかて（御本やかてナシ）のちつるに（御本つひにトカケリ）けふまてしらす（御本此一句ナシ）よくて（家本て文字ナシ）やあらん（家本あるらん）あしくて（家本て文字ナシ）やあらん（家本あるらん）いにし所も（御本いくところも）しらすかの（御本しらてやみぬ）このおとこは（御本此下いみしう）あまのさかてをうちてなんのろひをるむくつけきこと人の（御本此下おもひは）のろひことは（御本此一句ナシ家本は文字ナシ）おふものにやあらん（御本あるらん）おはぬものにやあらん（御本此十一字ナシ）いまこそは（家本は文字ナシ）みめとそいふなる（御本いひける家本玉かつら ノ段ニツヽク九十七）むかしほり河のおほい（御本おはるトカケリ家本おはいナシ）まうちきみと申すいまそかりけり（家本います かりける）四十の賀九條の家にて（家本殿にて）せられける日（御本日ナシ屏風にトアリ）中將なりけるおきな

さくら花ちりかひくもれおいらくのこんといふなる道まかふかに（御本二ノ句ちりかひまかふ 終句道せとふ 家本終句道せとふ）

（へく此次わすれ草ノ段ニツヽク）

九十八　昔おほきおほいまうち君（御本家本おほきおとトアリ）ときこゆるおはしけりつかう（御本つかふトカケリ）まつるおとこなか

月はかりにむめの（御本さくらの家本に文字ナシさくらのトアリ）つくり（御本つりたる）、えたにきしをつけてたてまつるとて

わかたのむ君かためにとおる花はときしもわかぬ物にそ有ける（御本三句をる花トカケリ家本四句ときしもまたぬ）

とよみてたてまつりたりけれは（家本りけり二字ナシ）いとかしこくおかしかり（御本かし家本御っかひに）給ひて使に（家本御っかひに）ろくたまへりけり（御本けりけりナシ時本けるトノリ家本給はりけり此次ひこ性しの段ニツヽク九十九）

むかし右近の馬場の（家本左近のゐさはのゐさはは）ひをりのひむかひにたてたりけるくるまに女の（御本の文字ナシ）かほのしたすたれよりほのかにみえけれは（御本みゆれは）中將なりけるおとこの（御本中將なる人トアリ男ナシ）よみてやりける（御本へる）

みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさん（御本三ノ句こひしきは）

かへし

しるしらぬ何かあやなくわきていはんおもひのみこそしるへ也けれ（御本しるしらす）

のちはたれとしりにけり（御本此一句ナシ家本のちあひにけりトアリ此次かせふけはノ段ニツヽク）

むかし（百）おとこ後涼殿の（御本家本こうきてんの）はさまを（家本はさせより）わたりけれは（御本わたりたりけれは）あるやんことなきひとの御（家本御文字ナシ）つほねよりわすれ草をしのふくさとやいふとていたさせ（御本さしいたさせ）給へり（家本たけれはたまはりて

わすれ草おふる野へとはみるらめとこはしのふなりのちもたのまむ（御本此次ちはやふる神代ノ段ニツヽク家本三句しるら

百一　めと此次とりの子ノ段ニツヽク

昔左兵衛督家本督ナシなりけるありはらのゆきひらといふ有けりその人の家によきさけ家本けさ　有ときゝてうへに有ける左中辨藤はらのまさちか家本皇近トアリ　といふをなん家本いふ人をんカ　まらうとさねにて家本さねにしてその日は家本は文字ナシあるしまうけし家本し文字ナシたりけるなさけある人にてかめに花をさせりその花のなかにあやしきふちの花有けり花のしなひ三尺六寸はかりなん有ける家本なり六寸あり　それをたいにてよむ家本たいにてそこの人うたトアリよむ二字ナシよみはてかたにあるしのはらからなる家本なるナシあるししたまふ時本もうけしたまふ　ときゝてきたりけれは家本あるしにいそきていてたりけれは　とらへてよませけるもとよりうたのことは家本いろはのこ　しらさりけれはすまひけれとしゐてよませけれはかくなん

さく花のしたにかくるゝ人おほみありしにまさるふちの陰かも相本三ノ句人をおほみ

なとかくしもよむ家本なとかうよまん　といひけれはおほきおとゝのゐいくわのさかりに家本はなのさかりに　みまそかりて藤氏のことにさかゆるを家本藤氏人くさかゆるを　おもひてよめるとなんいひけるみな人ぞしらすなりにけり御本此一段ナシ家本みな人已下文ナシみる人きゝしらすある人くえよせす成にけりおはきおとゝ藤氏のさかゆるとはこのおとゝなりトアリ此次ぬれつゝそノ段ニツヽク

百二　むかしおとこ有けりうたはよまさりけれと御本家本えよせさりけれと世中を家本をは　おもひしりたりけり御本けるあてなる相本あてなりて女のあまになりて家本あまになりて六字ナシよの中を家本を文字ナシ　おもひうむして御本くわんして家本此下ニあまになりて　京にもあらすはるかなる山さとにすみけりもとしそくなりけれは御本もとしたしかりけれはよみてやりけるトアリ家本けり

そむくとて雲にはのらぬ物なれと世のうきことそよそになるてふ

となんいひやりける齋宮の宮なり（御本となん已下文ナシ家本齋宮のみなりナシ此次山のみなり段ニツヽク）

百三

昔男有けりいとまめにしちようにて（御本いとまめにしちようにト云文ナシ深草のみことにつかふまつりけり）あたなる心なかりけりふか草の（家本ふかうさのみかとになんつかう（家本心ナシ已下文ナシこゝろ家本ふかうさのことくしてつかうたまひけるころトアリ）あやまりやしたりけむみとたちのつかひ（御本めしつかり家本つかうたまひける人（家本人ナシ）をあひいへりけり（御本あひしりにけり）さて（御本あしたにいひやる家本あひはへりにけりさて）

ねぬるよの夢をはかなみまとろめはいやはかなにも成まさるかな（御本四句いやはかなくも）

となんよみてやりけるさるうたのきたなけさよ（御本家本となん已下文ナシ家本此次つれ〳〵の段ニツヽク）

百四

むかし（家本此間女人のこゝろをうらみて風吹はとはになみこすいはなれやわか衣手のかはく時なく（つれのことくさにいひけるをきゝてよひことにかはつのあまたなくなるは水こをまされ雨はふらねとトアリ）くてあまになれる（家本なれりけるなれ家本人有けるかたちを（家本かたみはやつしたれと（御本物や（御本や文字ナシ）ゆかしかりけんかものまつり（家本を文字アリ）みに出たりけるを（御本りけ二字ナシ家本出たつトアリ）おとこうた（御本うたナシ）よみてやる

世をうみのあまとし人をみるからにめくはせよともたのまるゝかな（御本終句おもはゆるかな家本三句しるからに）

これは齋宮の物見たまひける（家本みたまへる）車にかく（家本かゝ）きこえたりけれはみさしてかへりたまひに

昔男かくてはしぬへしといひやりたり（家本たり二字ナシ）けれは女

百五

（家本に文字ナシ）けりとなん（御本これは已下ノ文ナシ家本つもひあはり段ニツヽク）

しら露はけなはけなゝんきえすとて玉にぬくへき人もあらしを（御本けなはけなゝんきえすとも）

といへりけれはいとなめしと（御本いとナシねたしと　家本いとうらめしと）おもひけれとこゝろさしはいやまさりけり（家本なりけり御本此次花上百六ノ段ニツヽク）

むかしおとこみこたちのせうえうしたまふところにまうてゝたつた河のほとりにて（百七）

千はやふる神代もきかすたつたかはからくれなゐに水くゝるとは（御本二句神代もしらぬ家本此次そめ川ノ段ニツヽク）

むかしあてなる（御本なさあてなる）おとこ有けり（御本男のもとにこたち有ける）その（御本そのれを）おとこのもとなりける人を（御本此一句ナシ）内記に有ける（御本内記なる）藤原のとしゆきといふ人よはひけりされとまたわかけれは文も（御本されとナシこの女かはかたちよけれといなたわかゝりけれはにや文も家本わかけれは五字ナシ文はトアリ）おさ〳〵しからすこと葉もいひしらすいはんやうたはよまさりけれは（時本えよさすりけれは家本は文字ナシよさすりけりされはトアリ）かのあるしなる（御本このあるしなりける）人あんをかきてかゝせてやりけり（御本人文の案をかきて女にかきうつさせてかへりことはしけりことはいかゝ有けん）めてまとひにけり（御本めてまとひて）さて（御本さて二字ナシ）おとこのよめる（御本よめりける）

つれ〳〵のなかめにまさる涙河そてのみひちてあふよしもなし

かへしれいのおとこ（御本おとこ三字ナシ）女にかはりて（相本れいの已下文ナシ）

あさみこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるときかはたのまむ

といへり（家本と二字ナシ）けれはおとこいと（御本いと二字ナシ）いとうめてゝいまゝてまさて（御本いまゝてまさてナシ時本いまゝてナシ家本まさてナシ）ふはこに入て（御本家本ふみトアリ）ありとなん（御本此五字ナシもてありくとそトアリ）いふなるおとこ（御本いふなるおとこのち家本此間二女のもとに）文おこせたり

えてのちのことなりけり（御本えて已下文ナシ家本ナシ）雨のふりぬへきに（御本もろてこんとする雨のふりぬへけれは家本雨のふりぬるに）なんみゝわつらひ侍る（御本侍るナシぬるトアリ時本侍りて家本侍りぬる）みさいはひあらは（家本御さいはひ相本身さいはひ）この雨は（御本は文字ナシ）ふらしといへりけれはれいのおとこ女にかはりてよみてやらす（御本よみてやらす六字ナシ）

かすゝに思ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる（御本二ノ句おもひおもはぬ）

とよみてやれりけれは（御本よみてナシとてやりたりけれは家本やれりノれ文字ナシ）みのもかさもとりあへて（家本あへす）しとゝにぬれて

まとひきにけり（御本に文字ナシ）

百八

むかし女人のこゝろをうらみて

風ふけはとはになみこす岩なれやわか衣手のかはく時なき（御本三句いそなれや家本終句かはく時なく）

と（家本と文字ナシ）つねのことくさにいひけるをきゝおひけるおとこ（御本きゝおよひけるをとこ家本きゝてトアリおとこナシ）

よゐことにかはつのあまたなく田には水こそまされ雨はふらねと（御本かはつのいたくなくなるは此次そなくとてノ段ニツヽク家本三ノ句なくなるはトアリ此歌ノ次ニことなることなくてあさになれりけるハ六々トいへる段ニツヽク）

百九

むかしおとことものたちの人を（家本を文字ナシ）うしなへるか（家本か文字ナシ）もとにやりける（御本いひやりける家本もとへやりける）

花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひんとかみし（御本三句なりにける此次思ひあまりノ段ニツヽク家本已下一段アリ是ヲのす）

昔男ある人にしのひてあひかよひけれはおとこにある人

中空に立ゐる雲のあともなくみのはかなくもなりぬへき哉

とわらふ人も有けり（此次しら露は ノ段ニツヽク）

百十 むかしおとこみそかにかよふ（御本みそかにナシ このひてかよふトアリ）女（家本人トアリ）有けりそれかもとよりこよひ（御本なんトアリ 家本こよひナシ）

夢になむ（御本なんナシ）みえたまひ（御本たまひナシ）つるといへり（家本みえたまへるといひ）けれはおとこ

おもひあまり出にし玉のあるならんよふかくみえは玉むすひせよ（御本初句こひわひて家本此次すはのあまの段ニツヽク）

百十一 むかしおとこやんことなき女のもとに（御本のもとナシ家本やんことなき已下文ナシ）なくなりにける（御本なくなれりける 家本やりナシ）を人を（家本ける女を）とふ

らふやうにていひやりける（御本いひやれる 家本やりナシ）

いにしへはありもやしけんいまそしるまたみぬ人をこふるものとは（御本二ノ句もやすらん）

かへし（御本女かへし家本御かへりこと）

した紐のしるしとするもとけなくにかたるかことはこひすそ有へき

またかへし

戀しとはさらにもいはし下紐のとけむを人はそれとしらなん（御本家本文かへし歌トモナシ 家本已下一段アリ是ヲのす）

むかし有けるいろこのみの女あきつかたになりておとこのもとに

今はとて我に時雨のふりゆけはことのはさへそうつろひにける

かへし

人おもふ心このはにあらはこそ風のまに〳〵ちりもみたれめ（此次うくひすの段ニツヽク）

百十二 昔おとこねんころにいひちきりける（御本家本相本ちきれる）女のことさまになりにけれは（御本なりにけるを）

すまのあまの鹽やく煙風をいたみ思はぬかたにたな引にけり

百十三 むかしおとこやもめにてゐて

なかゝらむいのちのほとにわするゝはいかにみしかき心なるらん（御本句なかゝらぬ此次玉かつらノ段ニツヽク家本初句同）

百十四 昔仁和の（御本ふか）みかとせり川に行幸し玉ひける（御本せり河のみゆきし玉ひけるに家本行幸有ける）時（御本時ナシなをきなの家本時になをおきなの）いまはさることにけなく（家本さることにけなくと）おもひけれともと（御本もと三字ナシ）つきにける事なれはおほたかの（御本家本おほかたの）たかゝひにてさふらはせたまひける（御本を文字アリ家本たまひけり）すりかりきぬのたもとに（御本此間つるのかたをつくりて）かきつけける（家本かきつけたる）

おきなさひ人なとかめそ狩衣けふはかりとそたつもなくなる（家本三ノ句かりくらし）

おほやけの御けしき（御本御気そくも）あしかりけり（家本ける）をのかよはひをおもひけれとわかゝらぬ人は（御本の文字ナシ）おほやけの御けしきゝとかめけりトアリ此次よの中にたえてさくらノ段ニツヽク家本きゝおひけるトアリとやナシふくかせにわか身をなさはの段ニツヽク家本）

百十五 むかしみちのくにゝて（御本家本て文字ナシ）おとこ女（御本女ナシ）すみけりおとこ（御本おとこナシ）みやこへいなんとゝふ

この（御本ゐへいなんとするにトアリこのナシ家本いふをこの）女いとかなしうて（御本かなしとおもひて家本かなしおもトアリて文字ナシ相本かなしくて）うまのはなむけをたに（家本本

むさのはなむけトせんとておきのひて相本て文字ナシ　みやこしま御本みやこつしまといふ所にて家本となんいひけるそこにて　ひさけのませて御本さけのませんとして　よめる

をきのゐて身をやくよりもかなしきはみやこしまへのわかれ也けり御本三句わひしきはみやこつしまへのトアリ此歌ノ次ニとよめりけるにめてゝとまりにけトリアリ家本此次おもふにはノ段ニツヽク

百十六　むかし男家本男ナシ　すゝろに家本そゝろにて　みちのくにまでまとひいにけり家本ありきけるおとこ　京におもふ人にいひやる家本人のもとへいひやる

なみまよりみゆるこしまの濱ひさし久しく成ぬ君にあひみて

何こともみなよくなりにけり家本みなよになをりにけり　となんいひやりける御本此一段ナシ家本いひたりける此次いはねふみノ段ニツヽク

百十七　むかしみかとすみよしに家本すみよしの行幸したまひけり家本し給ひしに

われみても久しく成ぬすみよしの岸の姫松幾世へぬらん

おほん家本おほんナシかのトアリ神けきやうしたまひて家本けいしたまひて

むつましと君はしら浪みつかきの久しき代より思ひそめてき御本此一段ナシ家本二句君はしらしら紹句いはひそめてき此次おはよとの松ノ段ニツヽク

百十八　昔おとこひさしく御本家本ひさしう　をともせてわするゝ心も御本も文字ナシ　なし家本わすれゝことなく　まいりこんと御本まいらんと家本今ないら　いへりけれは御本女トアリ家本いひけれは

百十九 玉かつらはふ木あまたに成ぬればたえぬ心のうれしけもなし（家本下句たえぬこゝろのはトアリ此次よの中にたえて櫻の段ニツヽク）

むかし女の（御本の文字ナシ）あたなるおとこのかたみとてをきたるものともを見て

かたみこそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらましものを（御本おはかたはノ段ニツヽク家本此一段ナシ）

百二十 むかしおとこ女のまた（御本また）世へすと（御本とにへすと）おほえたるか人の御（御本家本御文字ナシ）もとにしのひてものきこえて（家本ものきこへて）のちほとへて

近江なるつくまの祭とくせなんつれなき人のなへの數みん（家本三句はやせなん此次山しろの段ニツヽク）

百廿一 昔男梅つほより雨にぬれて人のまかりいつるをみて（御本まかつるをみて家本まかへるをみて殿上にさむらひけるをりに）

うくひすの花を縫てふかさもかなぬるめる人にきせてかへさむ

かへし

うくひすの花を縫てふかさはいなおもひをつけよほしてかへさん（御本かへし已下歌トモナシ家本同シ此次いにしへのにはひ）

百廿二 むかし男ちきれることあやまれる（御本あやまてる）人に（はノ段ニツヽク）

やましろのゐての玉水てにむすひたのみしかひもなき世也けり（御本家本三句てにくみて）

といひやれと（御本かろいへと家本やれる）いらへもせす（御本いらへす家本此一句ナシ）

百廿三 昔おとこ有けり深草にすみける（御本家本けり）女を（御本を文字ナシ）やう〳〵（家本すこしトアリやう〳〵ナシ）あきかたにやおもひけ

ん家本なりにけん　かゝるうたをよみけり御本もの〳〵出たちてゆくとてトアリかゝるうたをよみけりナシ家本よみてけるとしをへてすみこしさとをいてゝいなはいとゝ深草野とやなりなん御本二句すみこしやとを家本終句野とやしけらん

女かへし

野とならはうつらとなりてなきをらんかりにたにやは君はこさらん家本終句君かこさらん名本うつらとなりて年はへゝん

とよめりけるに家本とナシかくよめるをきゝて相本とよめるに　めてゝ御本いてゝ　ゆかんとおもふこゝろなくなりにけり御本こゝろうせにけり

百廿四

むかしおとこいかなりける家本りけナシことを御本ことを家本を文字ナシおもひけるおりにかよめる　御本おりにやありけんトアリよめるナシ家本

百廿五

おもふことをいはてそたゝにやみぬへきわれとひとしき人しなけれは御本此次すみわひぬノ段ニツゝグ

むかしおとこわつらひてこゝちしぬへくおほえけれは御本我うへに露をおくなるノ歌ノ次おとこにかきりになりける時トアリテ此歌ニツゝケアリ

つゆにゆくみちとはかねてきゝしかときのふ今日とはおもはさりしを御本此歌ノ次とこなんたゝいりにけり時本二句道とはきゝしものなれとトアリ

初段
しるよし

伊勢安齋先生云かすかのさとにしるよしゝてかりにいにけるとあるを古註にしるよしとは知行所の事にて業平の領地といへり予はしるよしとは知由にて相知て交るへき由有人といふ事かりにいにけりとはかの人の家にかりそめにやとり留り居たることなるへしとかねておもひしに堤中納言物語（おもはぬかたにとまりする少將）に大納言の姫君ふたりものし玉ひ云々故さとにいと心ほそくておはせしに右大將の御子の少將しるよし有ていとせちに聞えわたり給ひしかと云云これにてよくしられたり弘賢曰眞名本にこゝは知由爲とかゝれたれはよくきこえたる樣なれとあしやのさとにしるよしゝてといふ所に所知在而とかゝれたれはまきらはしきなり

九
八橋

塗籠御本には水のくもてになかれわかれて木八わたせるによりてなん八橋とはいへると有これにはれは×如此すちかひになかれたる川に四ケ所に木を二本つゝわたせるなるへし今の本にはしをやつわたせるとあるはむかしの本に樹の字書て有しをうつしあやまりて橋とかきしにもやあらんくもてとはくみての轉音なりくみてとは×如此かたちをいふはしのくもてといひ平家物語にくもてゆひたるとみえしもみなこのさまなり蜘の手をくもてといふことはさらになきことなりくはしきことは別に考あり

九　しほしり

潮をたるゝ砂のかたちといふことたれもきゝしりたることなり稻葉駿河守正喬朝臣木曾路日記云鹽尻山とて此あたりにてはかたちのなたらかなる山あり云々伊勢物語に富士の山をなりは鹽しりのやうにてとかけるをこま〳〵の祕傳有ていひ傳へたれともこゝにいたりて見侍れは富士の山はこのしほしりの山に似たるゆへいせものかたりにかくは書侍りたりとおほえらるゝやうなりとみゆ或人こゝよりふしみゆるゆへしほしり山となつけしならんといへり爲家卿筆の本にはなかはゝしほりの山となむいひけると有弘賢按するにふしのねのかみは草木生せすなかはよりしもは喬木鬱茂せり道もふみわけかたけれは入人ことにしほりせしなるへしされはなかはゝしほりの山といひしもむへなり塗籠御本には時しらぬといふ歌の次にこの山はうへはひろくしもはせはくて大かさのやうになむ有けるたかさはひえの山をはたちはかり云々とつゝきたりなりはしほしりのやうになむ有けるといふ一句なし按するにうへはひろくしもはせはくてとはきこえすうへはせはくしもはひろくと有しをうつしあやまれるにや又曰鳴は汐尻と解るはいかゝあらん塗籠御本にもかたちをいひしうへに澤とも湖ともいはて水音の鳴をいはむことは有ましきなり

十四　中〳〵に

安齋先生の說になか〳〵といふ詞歌の抄物にも義を解かすなか〳〵は中々の字義にはあらすなかれ〳〵といふことなりなかれ〳〵はいふ事なかれいふことなかれの畧語なり文字には莫レ言コトとも勿レ論コトとも書へし逢ことのたえてしなくはなか〳〵に人をも身をもうらみさらまし此心はあふことのあれかしといふことなかれあふといふことのたえてなくは人をも身をもうらむましきそといへる也常のことはにもおもきものなとを持てみてあけられさるときなか〳〵あけられぬといふはたやすくあくへしといふことなかれあけらるゝことならすといふこゝろにていへるなり古歌になか〳〵といふことはゝみなかくのことく心得へし和語ニ畧語約語等あるをみな其こと葉に付てあて字を用ひ來る故そのあて字にては義解しかたしといはれしはめつらしき說なからよくかなへりともおもはれす弘賢おもふにはなからく〳〵の下畧にてなま〳〵といへるにゝたる詞なりなからとは物半分の事にてそれをかさねいへるは十分ならぬ意なり今の世になまなかといふはこの二の詞を合せしなり源氏物語桐壺にかしこきみかけをはたのみきこえなからおとしめきすをもとめ給ふ人はおほくわかみはかよはくものはかなき有さまにてなか〳〵なる物おもひそし給ふ云々はか〳〵しうしろみおもふ人なきましらひは中〳〵なるへきことゝおもふたまへなから云々なとみえたるなとみなこの義にあ、りされは戀死なんといふ願十分にかなはすはせめてくは子にならま

ほしといへる意なり（をかゝを半らゝと註せしは崔葉槐の若葉に既に云り）

十四

きつにはめなてくたかけの

此はめなてといふ語きこえかたしとて眞名本爲食とかけるによりてはめなんとよむへしといふはいかならん塗籠御本に手の字爲家卿筆本にての字をかゝれたりそのほかあらゆる本にはめなことのみ有てはめなんと書しはあらす此歌もとみちのくの方言を集てよめる故に都になき詞なりしかしなから備中の人にきゝしにかの國には此類の詞有ゆかむといふへきをゆかてせんといふへきをせてといへるよしなりかれなてあまのあしたゆくくる又竹取物語にぬれたる衣たにぬきかへなてなむといへるなてとけをのつから別なるへし語意解しかたしといへともしゐていはゝはめなちふといふ語の約りしにも有へき歟さらは共義は將食といふことなれは眞名本にこの二字を書てはめなてと訓點有しなるへしさてきつにとは萬葉集にも狐にといふへきをきつにとよめることあれは誰も狐のことゝおもへとさにあらすみちのくにゝてきつといふは水槽のことなり竹ともしき所ゆへ家ことに槽を造りて水をたくはふるなりこの事南部津輕の人にたしかにきけりそれをきつとしもいふは木地櫃の中畧にてもあるへきにやくたかけとは栗本千夏か說にくたとは朽腐の義なり此歌ひなひてきつにはめなてなとよめるからに鷄を詈てくたれかけといひしなるへしといへりくたらかけ

の中畧といひ又家をくたといふ説なとも信しかたしもしくたらかけをくたかけとよむへくは誰もよむへきに此歌より外にみえされはさにはあらさるへしさて一首の意は鶏の宵なきせしを夜のあくるかとおもひて男のかへりし故にその宵なきを止めん爲に水槽にひたさんといへるなり鶏のむねを水にひやせは宵なきせすといふこともひたすことをはめるといふ詞も今現にあるならはしなり

廿二
あひみては

あひみては心ひとつをかはしまの水のなかれてたえしとそおもふこの歌初句きこえかたし塗籠御本にはあひはみてとありこれにてよくきこえたり然るに逢みてはと有かたまされりといふ人有いかならむ

四十九
ねよけ　ことをしそ

うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはんことをしそおもふ六條宮御本と知歌抄とにむかし男いもうとのいとおかしけなる琴をしらふとてみをりてと有これにてねよけのことはことをしその詞よくきこえたり源語に在五か物語かきていもうとにきんをしへたる所の人のむすはんといひたるをみて云々包宮の歌に若艸のねみむものとはおもはねとむすほゝれたるこゝちこそすれとありて下の詞にうらなくものをといひたるとみえしはすな

はちこれらの本によりしものなり

六十三　つくも髪

知歌抄につくもかみとは油もなくしろき髪を云なりつくもといふてすけのやうなる草有此草は立なから白雪のふりたるやうにかれてしるもなき草なりされはしるもなきかみのしろくなりたるを此草にたくへてつくも髪とはよめりとみゆこの書は經信卿の作にはあらてはるかに後の人の依託なれと證とすへき事少からすよりておもふに和名類聚鈔水菜部（辨色立成を引て江蒲草都久毛一云太久萬毛）といふもの其形狀さたかならされともふとゐ漢名香蒲草といふに似たる名なれはその類にてやあらんふとゐの枯ふしたるも大やう此すかたなり然るをつくもの名には江浦草を引て髪のさまをは水雲（モクノ）にたとへたるはくはしからす水雲は老女の髪にたとふへきものともおもはれす又若狹の國にては神馬藻をつゝもといへはつくもはつゝものあやまりなるへし上田秋成ある人の說を引て若狹につくもといふものあり常ある藻の葉末にやとり木のことくなる物ありそれをとりて見れは世にいふつくもなり藻にとりつく故にしかいふといへるはあやまりなりつゝ藻はあれともつくもといふもの有ことなしといへる人あれと神馬藻も老女の髪にたとふへしともおもはれす或說につくもかみはたゝ白髪といふことなるへし百の字の一を減せは白字となるゆへ白といはむとてもゝとせに一とせたらぬと興言せし

にや上總の國にて白里とかきて九十九里とよめりといへりさる離合體のこともあることなれと九十九と書てつくもとよむこと此物語より古きことならはさもあるへしかならす此詞によりてよめるやうなれは信かたし又ある人のつくも髪はつかみ髪といふ詞の轉せしにて老女の髪の一つかみほとあるといふことにやともいへり又ある人のつくも神の繪詞に年ふりし物たゝり有といふ意にて髪のことにはあらしともいへれとかの繪詞もこの物語より後のものなれはおほつかなし

六十五　もにすむ虫のわれから

玉かつまに四日市の浦の船人とものわれからくはぬ僧もなやと口すさひたるにふと耳とまりてわれからといふはいかなるものそと問しかは打わらひてわれからをしらぬ人もありけり海のもの中にましりてもはら藻のさましたるむしなり海菜の中にましりたるをはさなから乾たるをいろも形もわきかたけれはえしらて法師もみなくふなりといふ猶とふに春の末頃とる雜魚の中にもましりて長さ多くは三寸四寸はかり有て色青くまれには黄はみたるもありて藻のことくにみえてうこくものありそれなりとそいひけると見えしにてわれからの今も正しくある事をしりて尾張國の人にたつねけれはかしこにも有とてゑにうつしてをこせたり長さ二寸はかりにてほそきむしの前にもあとにもいとほそき足ありてそのあしをの

へて藻につきたるはたゝ藻のくきにまかへる物なりといへり猶くはしきことは別にしるしをけりされとわれからといふ名義は未考すしかるを浮藻につきて小螺蝸牛なとのかたちしていと小やかなる貝にすむ虫の魚介なとに化する時己か殼を脱出るものありさるものゝ中にをのれ其殼を破て出る故破殼虫とはいふ歟といへるはよくもしらぬをしはかりことなれはいふにたらすまことのわれからは臭にすむものにはあらす伴信友の說にわれからは和布又は海菜なとの中にをるものそれを海人なとのことさらにとるにはあらねと藻とゝもに刈あけられてわれからいのちおとすものゆへにわれからともみつからともいふと浦人のいふよしきけりとそ

八十九
あふな〳〵

眞名本に隨分二字をよめり是によれはその意はあきらかなれと訓義いまた詳ならす然るにわか身のほとに隨ふ意にてしか書たれは我力のほとに隨ひたる重荷を負にたとへたる語なり故に假字もおふな〳〵と書へしといへるはあやまりなりその故は古筆諸本あと書しうへ白氏文集古點本に隨分をナッサ〳〵とよみ後醍醐天皇宸翰和譯朗詠集にナッサ〳〵ナフサ〳〵と兩樣にみえ類聚名義抄伊呂波字類抄平他字類抄等にもナフサ〳〵と註し常陸國にナムサヅケムラといふありて文字には隨分村村とかけり節用集の姓氏に隨分付の三字をナツ

サツケとよめりこれらを合考ふるにアとナと同韻フとツと同韻ナとサと同韻なれはおと書へき様なしをのつから別義あるへきなり伴信友云萬葉集第八さをしかの芽に貫置る露の白珠相佐和に誰の人かも手にまかむちふ第十一にやましろの來脊の若子か欲しといふ余を相狹丸吾を欲しといふ山代のくせとあるあふさわとは身のほとに似あはしき人の手にまかんといふ意次はほしといふことのふさはしく嬉しき意ふくみてきこゆれは隨分の字義にかなふやうなりすなはち相佐和といふことのつゝまりてあふさとなり相通にてあふなともなりなふさともなれはあふな〳〵の言のもとは相佐和なるへきにやあふさわとはあふさまと同しこゝろなりといへり又曰伊呂波字類抄に驃馬をナフサムマとよめるは驃は字書に馬行疾貞也とありもとより馬はとく行へきものなるから其隨分に行よしにてナフサムマとよめるにやあらんといへり弘實曰玉篇に驃は驃勇也と註し驃は勇敢捷也良馬也と註せり行疾貌といふは集韻なり

九十四
霞に霧や千重まさるらん

爲家卿筆の本にたちまさるらんとあり

九十六
あまのさかて

あまのとは神代をうけしことにすへてかうふらする詞さかてとは後手と書さかてうつとは人に對て退かむとするとき手うつをいふ古事記に天逆手と書れしは假借なり延喜大直神祭

式に行酒三杯已後拍手退出とみえたるそ正字なる退をさかるとよむ故にさかりての中略なり男か女にをさをさりにせられてせんかたなく我も退く意になりて天のさかてをうちたるなり下の文にむくつけきこと人のゝろひ事はおふものにやあらんおはぬものにやあらむといへるによりてさかてはのろひ事にうつものとおもへるは誤なり古事記に天の逆手を青柴垣に打成とは葦原中國を天神の御子にゆつり奉て二たひ此國に入ましき事青柴垣を結ひさへきりて入られさるかことくする意に天の逆手を打て退き給ひしといふ事なりと安齋先生はいはれしこのほか海士のさかてといひうしろのかたにて打といひ凶事には末ほとかすかに打といひ指先を下へをしたれてうつといひ掌を外になして手の甲をうち合するといひ左と右との上下を逆にやりちかへて拍をいふかといへる說ともいつれも信かたしくはしきことは華陽公子の考一册あり

もとたちて道なるともろこし人の言の葉はむへなるかな恩頼館のあるしの手かく事にあやしうたへなるは三世をつたへて宿世あるゆへ成へし今は又故人のこゝろをさくりしらては筆のをきてすまぬところあなりとてむさし野のひろく學ひ竹芝の浦のふかくたつねてやまともろこしの書をさへこゝらつとへ給へりそのはしめさかつきを浮ふるなかれの底なきにいたれるたくひとやいはむあるか中に此物語は名におはせたる下のこゝろなりとかいふめるひか事ともにや又は豆男のまめなるところより出けるにやさま〳〵にかきつたへつゝたかひめ多かるをあつめものしてすまあかしのうらやみなく唯ほとめにみわたさるゝやうに書なしみむ人の心のまゝに浪速のよしあしをさたむへくをきてられたるもしろき糸のそまん事をかなしみ道のちまたのかす〳〵にわかれたるなとをなけくたくひならすあまねき心のひろさなるへしこれを梓にのほせておなしこゝろの人々にみそなはせん此すゑのかたにふてそへよと宣へりされと溫故堂の主人なとひとしなみにあるへき事かはとゝなひ申さまほしけれとさしてきこえ給へるみこゝろさしをおもふにかゝるおもておこしの又有へきことならすとつゐに才のみしかきをもはちす知のたらさるをもかへりみす他のそしりをさへわすれてくた〳〵しきことをみたりかはしき筆の跡にとゝむる事とはなりけらし文化十四年二月袋翁

文化十四年仲春刻成

製本
弘所

京都書林　堀川高辻上ル　植村藤右衛門
大坂書林　心齋橋安藤寺町　秋田屋太右衛門
江戸書林　淺艸新寺町　和泉屋庄次郎
池端仲町　須原屋伊八

彫工　朝倉八右衛門

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隱なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと謗稱する全集が其編纂に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を縛縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推奬するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此擧に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

新訓 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★
新訓 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★
自交 萬葉集 上卷 佐佐木信綱編 ★★
自交 萬葉集 下卷 佐佐木信綱編 ★★
古事記 幸田成友校訂 ★
標訓 日本書紀 上卷 黑板勝美編 ★
標訓 日本書紀 中卷 黑板勝美編 ★
標訓 日本書紀 下卷 黑板勝美編 ★
記紀歌謠集 武田祐吉校註 ★
古語拾遺 加藤玄智校訂 ★
水鏡 和田英松校訂 ★
大鏡 和田英松校訂 ★
增鏡 和田英松校訂 ★
神皇正統記 山田孝雄校訂 ★

三條西家本 榮花物語 上卷 三條西公正校訂 ★
三條西家本 榮花物語 中卷 三條西公正校訂 ★
三條西家本 榮花物語 下卷 三條西公正校訂 ★
參考 伊勢物語 鳥代弘晉校訂 ★
竹取物語並附錄 島津久基校訂 ★
保元物語 岸谷誠一校訂 ★
平治物語 岸谷誠一校訂 ★
平家物語 上卷 山田孝雄校訂 ★
平家物語 下卷 山田孝雄校訂 ★
十六夜日記 玉井幸助校訂 ★
源氏物語 (一) 島津久基校訂 ★
源氏物語 (二) 島津久基校訂 ★
源氏物語 (三) 島津久基校訂 ★
源氏物語 (四) 島津久基校訂 ★
源氏物語 (五) 島津久基校訂 ★
土佐日記 池田龜鑑校訂 ★
紫式部日記 池田龜鑑校訂 ★

更級日記 西下經一校訂 ★
枕草子 (春曙抄) 上卷 池田龜鑑校訂 ★
枕草子 (春曙抄) 中卷 池田龜鑑校訂 ★
枕草子 (春曙抄) 下卷 池田龜鑑校訂 ★
倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 ★
梁塵祕抄 佐佐木信綱校訂 ★
古今和歌集 尾上八郎校訂 ★
新撰 山家集 佐佐木信綱校訂 ★
新古今和歌集 佐佐木信綱校訂 ★
新訂 金槐和歌集 改訂增補 齋藤茂吉校訂 ★
中世歌論集 久松潛一編 ★
藤原定家 歌附定家集年譜 佐佐木信綱校訂 ★
法華義疏 上卷 聖德太子御製 花山信勝校讀 ★
法華義疏 下卷 聖德太子御製 花山信勝校讀 ★
解脫上人愚迷發心集 高瀨承厚校註 ★
正法眼藏隨聞記 懷奘編 和辻哲郎校訂 ★
日蓮上人文抄 姉崎正治校注 ★

一遍上人語錄　藤原正校註★
夢窓國師夢中問答　佐藤泰舜校訂★★
歎異抄　金子大榮校訂★
徒然草　西尾實校訂★
方丈記　山田孝雄校訂★
花傳書　世阿弥上野豐一郎校訂★
申樂談義　世阿弥上野豐一郎校著★
能作書・覺習條條書　世阿弥上野豐一郎校著★
至花道　世阿弥上野豐一郎校著★
入木道三部集（附本朝能書傳）　藤岡榮校訂★
奥の細道その他　芭蕉作伊藤松宇校訂★
芭蕉七部集　伊藤松宇校訂★★★
芭蕉連句集　小宮豐隆編★★★
芭蕉書翰集　勝峯晋風編★★
芭蕉俳句集　潁原退藏校註★★
蕪村七部集　伊藤松宇校訂★★
風俗文選　伊藤松宇校訂★★
鶉衣　石田元季校訂★★
おらが春・我春集　一茶作藤井泉水校訂★
一茶遺稿父の終焉日記　萩原井泉水校訂★
風俗柳多留　上卷　西原柳雨校訂★★
風俗柳多留　中卷　西原柳雨校訂★★
風俗柳多留　下卷　西原柳雨校訂★★
萬載狂歌集　野崎左文校訂★
德和歌後萬載集　野崎左文校訂★
松の葉　藤田德太郎校註★★
松の落葉　藤田德太郎校註★★
閑吟集（附室町小歌拾遺集）　狂言小歌集藤田德太郎校註★
好色一代男　西鶴作田山萬吉校訂★
好色一代女　西鶴作田山萬吉校訂★
好色五人女　西鶴作田山萬吉校訂★
日本永代藏　西鶴作田山萬吉校訂★
世間胸算用　西鶴作田山萬吉校訂★
西鶴織留　西鶴作田山萬吉校訂★
武家義理物語　西鶴作田山萬吉校訂★
武道傳來記　西鶴作田山萬吉校訂★
西鶴諸國咄　西鶴作田山萬吉校訂★
本朝櫻陰比事　西鶴作田山萬吉校訂★
椿說弓張月　上卷　曲亭馬琴作田山萬吉校訂★★
椿說弓張月　中卷　曲亭馬琴作田山萬吉校訂★★
椿說弓張月　下卷　曲亭馬琴作田山萬吉校訂★★
國性爺合戰　近松門左衛門作田山萬吉校訂★
鐘の響三重帷子　近松門左衛門作田山萬吉校訂★
會我會稚山　近松門左衛門作田山萬吉校訂★
心中天の網島　近松門左衛門作田山萬吉校訂★
胡蝶物語　曲亭馬琴作田山萬吉校訂★★
浮世風呂　式亭三馬作田山萬吉校訂★★
浮世床　式亭三馬作田山萬吉校訂★
東海道膝栗毛　十返舍一九作田山萬吉校訂★★★
洒落本集　高木好次校訂★★
雨月物語　上田秋成鈴木敏也校訂★
玉勝間（上）　村岡典嗣校訂★★
玉勝間（下）　本居宣長著村岡典嗣校訂★★
うひ山ふみ　本居宣長著村岡典嗣校訂★
玉くしげ　本居宣長著村岡典嗣校訂★
鈴屋答問錄　本居宣長著村岡典嗣校訂★
秘本玉くしげ　本居宣長著村岡典嗣校訂★

譯註良寛詩集　大島花束　原田勘平　譯註★★
加賀　鳶　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
赤垣源藏・仲光　默阿彌作　河竹繁俊校訂★
忍ぶの惣太　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
縮屋新助　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
孝子善吉　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
鼠小僧　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
實錄先代萩　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
お禮三　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
靜仙　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
笠森お七　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
辨天小僧　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★
鳩の平右衛門　默阿彌作　河竹繁俊校訂★★

小說・戲曲・詩歌・隨筆・評論

こゝろ　夏目漱石著★★
草　夏目漱石著★★
人　夏目漱石著★★
道行　集　夏目漱石著★★
漾虛　枕　夏目漱石著★
草　夏目漱石著★
坊っちやん　夏目漱石著★
硝子戸の中　夏目漱石著★
明暗　上卷　夏目漱石著★★
明暗　下卷　夏目漱石著★★
五重塔　幸田露伴著★
風流佛・一口劍　幸田露伴著★
自然と人生　德富蘆花著★★
二人女房　尾崎紅葉著★
觀音岩　前篇　川上眉山著★★
觀音岩　後篇　川上眉山著★★
にごりえ　樋口一葉著★
たけくらべ　樋口一葉著★
うたかたの記（他三篇）　森鷗外著★
護持院ヶ原の敵討（他二篇）　森鷗外作★
新曲浦島　新曲赫映姫　坪内逍遙著★
運命論者（他二篇）　國木田獨步著★
源をぢ（他二篇）　國木田獨步著★
號外（他六篇）　國木田獨步著★
櫻の實の熟する時　島崎藤村著★★
千曲川のスケッチ　島崎藤村著★
飯倉だより　島崎藤村著★
春を待ちつつ　島崎藤村著★
生ひ立ちの記　島崎藤村著★
蒲團・一兵卒　田山花袋著★
田舍教師　田山花袋著★★
風流懺法（他三篇）　高濱虛子著★
宣言　有島武郎著★
小僧の神樣（他十篇）　志賀直哉著★★
和解・或る男　志賀直哉著★★
其姉の死　志賀直哉著★★
陸奥直次郎　長與善郎著★
青銅の基督　長與善郎著★
偷盜　芥川龍之介著★
侏儒の言葉　芥川龍之介著★
河童　芥川龍之介著★
馭世家の誕生日（他六篇）　佐藤春夫著★★
入江のほとり　正宗白鳥著★

生きしならば　正宗白鳥著　☆
大石良雄　野上弥生子著　★
海神丸　野上弥生子著　★
出家とその弟子　倉田百三著　★★
布施太子の入山　倉田百三著　★
幸福者　武者小路實篤著　★★
その妹　武者小路實篤著　★
人間萬歳　武者小路實篤著　★
友情　武者小路實篤著　★
煤煙　森田草平著　★★
波　山本有三著　★★★
病牀六尺　正岡子規著　★★
墨汁一滴　正岡子規著　★★
仰臥漫録　正岡子規著　★★
子規歌集　正岡子規著　★
左千夫歌集　齋藤茂吉土屋文明選　★
左千夫歌論抄　齋藤茂吉土屋文明編　★★
長塚節歌集　齋藤茂吉選　☆★
上田敏詩抄　茅野蕭々編　★☆
晩翠詩抄　土井晩翠著　☆☆
藤村詩抄　島崎藤村自選　★★
有明詩抄　蒲原有明著　☆★
泣菫詩抄　薄田泣菫著　★★
白秋詩抄　北原白秋著　★★
白秋抒情詩抄　北原白秋著　★★
文藝　逍遙遺稿　坪内逍遙　金子筑水　相馬御風譯　★★
歌舞音樂略史　小中村清矩著　★★
俗樂旋律考　上原六四郎著　★
蘭學事始　杉田玄白著　野上豊一郎校訂　★
茶の本　岡倉覺三著　村岡博譯　☆
綱島梁川集　安倍能成編　☆★
清澤文集　清澤滿之著　★★
福澤撰集　福澤諭吉著　★★★
蹇蹇錄　陸奥宗光著　★★
北村透谷集　島崎藤村編　☆☆
海舟座談　長谷川如是閑編　★★

外國文學（小說・戲曲・詩）

註譯杜詩卷之一　漢山又四郎譯註　☆★
註譯杜詩卷之二　漢山又四郎譯註　★★
註譯杜詩卷之三　漢山又四郎譯註　☆★
註譯杜詩卷之四　漢山又四郎譯註　☆★
註譯陶淵明集　漢山又四郎譯註　★★
註譯唐詩選上卷　漢山又四郎譯註　☆★
註譯唐詩選（附作者傳）下卷　漢山又四郎譯註　★★
註譯李太白詩選上卷　漢山又四郎譯註　★★
註譯李太白詩選下卷　漢山又四郎譯註　★★
寒山詩　太田悌蔵譯註　★★
支那小說集　通俗古今奇觀　談滑主人譯　青木正兒校註　★
朝鮮童謠選　金素雲譯編　★★
朝鮮民謠選　金素雲譯編　★★

即興詩人 上卷 森鷗外譯 ★★
即興詩人 下卷 森鷗外譯 ★★
繪なき繪本 アンデルセン作 寺野寂々譯 ★
ブランド イプセン作 角田俊譯 ★★★
キイランド短篇集 ケラー作 前田晁譯 ★
村のロメオとユリア ケラー作 草間平作譯 ★
アルプスの山の娘 ヨハンナスピリ作 野上彌生子譯 ★★
幽靈 ストリンドベルク作 小宮豐隆譯 ★
妻 ストリンドベルク作 小宮豐隆譯 ★
稻妻 ストリンドベルク作 小宮豐隆譯 ★
令嬢ユリ エストリンドベルク作 寺野寂々譯 ★
大海のほとり ストリンドベルク作 野藤誠譯 ★★
島の農民 ストリンドベルク作 草間平作譯 ★★
オネーギン プーシキン作 米川正夫譯 ★★
スペードの女王 プーシキン作 神西清譯 ★
イワーン・イワーノッチとイワーン・ニキーフォッチとが喧嘩をした話 ゴーゴリ作 原久一郎譯 ★
外套 他二篇 ゴーゴリ作 伊吹山次郎譯 ★

昔氣質の地主たち ゴーゴリ作 伊吹山次郎譯 ★
檢察官 ゴーゴリ作 米川正夫譯 ★★
現代のヒーロー レールモントフ作 中村白葉譯 ★★
皇帝フョードル アレクセイトルストイ作 陰村吉太郎譯 ★
初戀 ツルゲーネフ作 米川正夫譯 ★
ひゝ ツルゲーネフ作 米川正夫譯 ★
散文詩 ツルゲーネフ作 神西清譯 ★★
ブウニンとパブリン トルゲーニエフ作 小沼丈夫譯 ★
罪と罰 第一卷 ドストエフスキイ作 中村白葉譯 ★★
罪と罰 第二卷 ドストエフスキイ作 中村白葉譯 ★★
罪と罰 第三卷 ドストエフスキイ作 中村白葉譯 ★★
兄弟 カラマーゾフの第一卷 ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
兄弟 カラマーゾフの第二卷 ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
兄弟 カラマーゾフの第三卷 ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
兄弟 カラマーゾフの第四卷 ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
惡靈 第一編 ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
惡靈 第二編(上) ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
惡靈 第二編(下) ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★★
惡靈 第三編 ドストエフスキイ作 米川正夫譯 ★

貧しき人々 ドストエフスキイ作 原久一郎譯 ★
永遠の良人 ドストエフスキイ作 原久一郎譯 ★★
戰爭と平和 第一卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
戰爭と平和 第二卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
戰爭と平和 第三卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
戰爭と平和 第四卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
戰爭と平和 第五卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
戰爭と平和 第六卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
戰爭と平和 第下卷 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
イヴァン・イリッチの死 トルストイ作 米川正夫譯 ★
結婚の幸福 トルストイ作 米川正夫譯 ★★
光あるうちに 光の中を歩め トルストイ作 米川正夫譯 ★
クロイツェル・ソナタ トルストイ作 米川正夫譯 ★★
復活 上卷 トルストイ作 中村白葉譯 ★★
復活 中卷 トルストイ作 中村白葉譯 ★★
復活 下卷 トルストイ作 中村白葉譯 ★★
闇の力 トルストイ作 米川正夫譯 ★
生ける屍 トルストイ作 米川正夫譯 ★

幼年時代　トルストイ作　米川正夫譯★★
少年時代　トルストイ作　米川正夫譯★
トルストイ民話集　人は何で生きるか他四篇　中村白葉譯★
トルストイ民話集　イワンの馬鹿他八篇　中村白葉譯★
藝術とはどういふものか　河野與一譯★★
ソーニャ・コヴァレフスカヤ　野上彌生子譯★★
接吻・可愛い女他二篇　チェーホフ作　久一郎譯★
シベリヤの旅他三篇　チェーホフ作　神西清譯★
櫻の園　チェーホフ作　米川正夫譯★
伯父ワーニャ　チェーホフ作　米川正夫譯★
三人姉妹　チェーホフ作　米川正夫譯★
幼年時代　ゴーリキイ作　湯淺芳子譯★★
サーニン　上卷　ルツィーシェフ作　中村白葉譯★★
サーニン　下卷　ルツィーシェフ作　中村白葉譯★★
賢者ナータン　レッシング作　大庭米治郎譯★☆
ヘルマンとドロテア　ゲーテ作　佐藤通次譯★
ヘルヘルム・マイスター　上卷　ゲーテ作　林久男譯★★★
ヘルヘルム・マイスター　下卷　ゲーテ作　林久男譯★★
フアウスト第一部　森鷗外譯★★
フアウスト第二部　森鷗外譯★★★
若いヱルテルの惱み　ゲヨエテ作　茅野蕭々譯★★
たくみと戀　シラー作　實吉捷郎譯★
ヴレンシュダイン　シルレル作　飯塚良一譯★★
ヴイルヘルム・テル　シラー作　櫻井政隆譯★☆
黄金寶壺　ホフマン作　石川道雄譯★
ハルツ紀行　ハイネ著　内藤匡譯★
グリム童話集　第一冊　金田鬼一譯★★
グリム童話集　第二冊　金田鬼一譯★★
グリム童話集　第三冊　金田鬼一譯★★
グリム童話集　第四冊　金田鬼一譯★★
グリム童話集　第五冊　金田鬼一譯★★
グリム童話集　第六冊　金田鬼一譯★☆
グリム童話集　第七冊　金田鬼一譯★☆
ゲエテと對話抄　エッケルマン著　尾崎英四郎譯★★
希臘の春　ハウプトマン作　城田碩一譯★
ソアーナの異教徒　ハウプトマン作　奥津憲重譯★★
日の出前　ハウプトマン作　橋本忠夫譯★★
沈鐘　ハウプトマン作　阿部六郎譯★★
平和の目ざめ　ヴェデキント作　野上豐一郎譯★
埋葬　ゲオルク・カイザー作　久保榮譯★
木靴　キリシネル作　森鷗外譯★
トオマス・マン短篇集1　トオマス・マン短篇集2　實吉捷郎譯★
維納の辻音樂師　グリルパルツェル作　石川錬次譯★
祖姐　グリルパルツェル作　岡本修助譯★
みれん　シュニツラア作　森鷗外譯★★
アナトール　シュニツラア作　小宮豐隆譯★★
青い鳥　メーテルリンク作　若月紫蘭譯★★
ポリウクト　コルネイユ作　村上仁譯★
ポオルとヴイルジニイ　サン・ピエール作　木村太郎譯★
人間嫌ひ　モリエール作　關口存男譯★
マノン・レスコオ　アベ・プレヴオオ作　河盛好藏譯★

スタンダール赤と黒上巻 桑原武夫 生島遼一譯★★
スタンダール赤と黒下巻 桑原武夫 生島遼一譯★★
従兄ボンス上巻 水野亮譯★★
従兄ボンス下巻 水野亮譯★★
知られざる傑作(他五篇) バルザック作 水野亮譯★★
海邊の悲劇他三篇 バルザック作 水野亮譯★
カルメン メリメ作 杉捷夫譯★
コロンバ メリメ作 杉捷夫譯★★
エトルリアの壺 メリメ作 杉捷夫譯★
(外五篇)
椿姫 デュマ・フィス作 吉村正一郎譯★★
女の一生 モーパッサン作 杉捷夫譯★★
ノア・ノア ポール・ゴオガン著 前川堅市譯★
水の上 モーパッサン作 吉江喬松譯★★
ビエルとジャン モウパッサン作 前田晃譯★★
生の誘惑(原名イヴ エット) モウパッサン作 前田晃譯★
モウパッサン短篇集 饗宴(他七篇) モウパッサン作 前田晃譯★
お菊さん ピエル・ロチ作 野上豊一郎譯★★
氷島の漁夫 ピエル・ロチ作 吉江喬松譯★★
若き日の手紙 フロイリップ作 外山滋夫譯★★
風車小屋だより ドーデ作 櫻田佐譯★★
騒氣なクルグラン ドミニー作 小川泰一譯★
プチ・ショウズ ドオデエ作 八木さわ子譯★★
(アナトール・フランス短篇集 聖恵と軽業師(他四篇))
愛と死との戯れ ロマン・ロラン作 片山敏彦譯★
獅子座の流星群 ロマン・ロラン作 片山敏彦譯★
法王廳の抜穴 ジッド・クッド作 淳譯★★
田園交響樂 ジッド・ヴィド作 川口篤譯★
クオレ 愛の学校上巻 アミーチス著 前田晃譯★★
クオレ 愛の学校下巻 アミーチス著 前田晃譯★★
恐ろしき妹 ホセ・エチェガライ 永田寛定譯★★
作り上げた利害 ベナベンテ作 永田寛定譯★
子守唄 シエルラ作 永田寛定譯★
希臘羅馬神話 バルフィンチ作 野上豊一郎譯★★
フォースタス博士 マーロウ作 松居松翁譯★
バーンズ詩集 中村憲治譯★★
あしながおじさん チェーン・ウェブスター 遠藤寿子譯★★
自然論 エマスン著 片上伸譯★
緋文字 ホーソン作 佐藤清譯★★
(ホーソン短篇集 優しき少年他十篇)
エヴァンジェリン ロングフェロー作 齋藤悅子譯★
草の葉 有島武郎譯★★
(ホイットマン詩集)
ポウ黒猫(他六篇) 森村豊 澤田卓爾譯★★
王子と乞食 マーク・トウェーン作 村岡花子譯★★
クリスマス・カロル ディケンス作 森田草平譯★
ブラウニングサウル 齋藤勇譯★
ラム沙翁物語 野上豊一郎譯★★
新アラビヤ夜話 スティーヴンスン作 佐藤緑葉譯★
ブレイク抒情詩抄 篇末文章譯註★
闘技者サムソン ミルトン作 中村憲治譯★
イノック・アーデン テニスン作 入江直祐譯★
イン・メモリアム テニスン作 入江直祐譯★★

ハーディ短篇集 幻類を追ふ女（他六篇） 森村豐譯 ★★
小公子 若松賤子譯 ★★
豐女 チョウンシヨオ作 野上豐一郎譯 ★★
（チヤンヌ・ダルク）
人と超人 シヨオ作 市川又彦譯 ★★
鰥夫の家 シヨオ作 市川又彦譯 ★★
黒潮の寄し限り（原名メトセラ時代に歸れ） シヨオ作 相良徳三譯 ★★
ビーター・パン ヂエイムズ・バリー作 本多顯彰譯 ★
靜寂の宿 ゴールズワージイ作 本多顯彰譯 ★★
爭鬪 ゴールズワージイ作 石田幸太郎譯 ★
サンスフィールド短篇集 樋口正澄譯 ★★
ユリシーズ（一） ヂエイムズ・ヂヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★
ユリシーズ（二） ヂエイムズ・ヂヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★
ユリシーズ（三） ヂエイムズ・ヂヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★
ユリシーズ（四） ヂエイムズ・ヂヨイス著 森田・名原他四名譯 ★★

哲學・自然科學・文學・宗教・教育

プラソクラテスの辯明 久保勇・阿部次郎譯 ★
トンク リ トン
プロタゴラス 菊池豐一郎譯 ★
カント 純粹理性批判 上卷（改訂版） 天野貞祐譯 ★★
カント 實踐理性批判 渡多野精一・宮本和吉譯 ★★
カントプロレゴーメナ 桑木嚴翼・天野貞祐譯 ★★
スピノザ 哲學體系 小尾節治譯 ★★
スピノザ 知性改善論 島中尚志譯 ★
哲學とは何か イマヌエル・カント 河東・ヴィンデルバンド譯 ★
歷史と自然科學・道德の原理に就て 篠田英雄・ヴィンデルバンド著 ★
認識の對象 山内得立・リツケルト著 ★★
七大哲人 安倍能成・オケン著 ★
人間機械論 杉捷夫・ド・ラ・メトリ譯 ★
ヒューム人性論 太田善男譯 ★★
人間の精神 レヒ祐雄譯 ★
心理學原論 大瀧義一・リツプス著 ★★★
科學の價値 田邊元・ポアンカレ譯 ★★
科學と方法 吉田洋一・ポアンカレ譯 ★★
科學者と詩人 平林初之輔・ボアンカレ著 ★★
將來の哲學の根本命題 植村習・フォイエルバハ譯 ★★
ヘーゲル哲學の批判（他一篇） 佐野文夫・フォイエルバハ譯 ★
史的に見たる科學的宇宙觀の變遷 寺田寅彦・アーレニウス著 ★★
ファラデー 蠟燭の科學 矢島祐利・クルックス編 ★
アルプスの氷河第一部 矢島祐利・チンダル著 ★★
アルプスの氷河第二部 矢島祐利・チンダル著 ★★
チンダル アルプスの旅より 矢島祐利譯 ★
ダル アルプス紀行 矢島祐利譯 ★★
自然認識の限界について・宇宙の七つの謎 坂田徳男・ヂユボアレーモン著 ★
自然に於ける美藝術の一般的意義 高村理智夫・ソロヴイヨフ著 ★
自然美と其驚異 板倉勝忠・ヴロンスキー著 ★★
ラ・プラタの博物學者 岩田良吉・ハドソン著 ★★
ケーベル博士隨筆集 久保勇・安倍能成編 ★★
カントとゲエテ 谷川徹三・ジムメル著 ★
ファーブル昆蟲記 林田遼・吉田壽夫譯

既刊 定價各★★

第二分册・第五分册・第九分册

第十分册・第十二分册・第十三分册
第十四分册・第十七分册・第十八分册
第二十分册

チャールズ・ダーウキン　F・ダーウキン著　小泉丹譯　★★
種の起原　上卷　ダーウキン著　小泉丹譯　★★
人及び動物の表情について　ダーウキン著　渡中潛次郎譯　★★
雜種植物の研究　メンデル著　小泉丹譯　★
生命の不可思議　上卷　ヘッケル著　藤條次譯　★★
生命の不可思議　下卷　ヘッケル著　後藤條次譯　★★
世界人類史物語　上卷　コフマン著　鈴木厚譯　★★
世界人類史物語　下卷　コフマン著　鈴木厚譯　★★
回想のセザンヌ　有島生馬譯　★
この人を見よ　ニーチエ著　安倍能成譯　★★
ミル自傳　四本正美譯　★★
ボワロー詩學　丸山和馬譯註　★
佛蘭西文學史　ブリュンチエール著　關根榮雄譯　★★
伊太利文藝復興期の文化　ブルクハルト著　村松恒一郎譯　上卷　★★

ペーター論集　同部直治譯　★★

ラフカディオ・ハルン東西文學評論　十一卷　三冊　三冊　★★
オ・ヘルン　三卷　三冊　三冊　★★
文學史の方法　テエヌ著　瀬沼茂樹譯　★
戀愛論　上卷　スタンダール著　前川堅市譯　★★
戀愛論　下卷　スタンダール著　前川堅市譯　★★
戀愛と結婚　上卷　エレン・ケイ著　原田・實譯　★★
戀愛と結婚　下卷　エレン・ケイ著　原田・實譯　★★
イエス（改譯版）　マルテイン・ルター著　石原謙譯　★
基督者の自由　林達夫譯　★
イミターショ・クリスチ（基督のまねび）　トマス・ア・ケンピス著　内村達三郎譯　★★
聖アウグスチヌス懺悔錄（全譯）　アウグスティヌス著　内村達三郎譯　★★
懺悔錄　上卷　山谷省吾譯　★
唯一者とその所有　上卷　スチルネル著　草間平作譯　★★
唯一者とその所有　下卷　スチルネル著　草間平作譯　★★
エミイル（第一篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★
エミイル（第二篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
エミイル（第三篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★
エミイル（第四篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
エミイル（第五篇）　ルソオ著　平林初之輔譯　★★
懺悔錄　上卷　石川巖庵譯　★★
懺悔錄　中卷　ルソオ著　石川巖庵譯　★★
懺悔錄　下卷　ルソオ著　石川巖庵譯　★★
人間不平等起原論　ルソオ著　本田喜代治譯　★★
人生論　トルストイ著　中村白葉譯　★★
獨逸國民に告ぐ　フイヒテ著　大津康譯　★★
内村鑑三隨筆集　内村鑑三著　★★
手島堵庵心學集　白石正邦編　★
文明論之概略　福澤諭吉著　★★
日本開化小史　田口卯吉著　★★
論畫四種　坂崎坦編　★
論語　武内義雄譯註　★★
孔子家語　藤原正校譯　★★
菜根譚　山口察常譯註　★
報德記　富田高慶述　★★
二宮翁夜話　福住正兄筆記　★★